
真・恋姫無双 三国志のボンゴレファミリー

ぐぎゆる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双 三国志のボンゴレファミリー

【Nコード】

N3455T

【作者名】

ぐぎゆる

【あらすじ】

未来で白蘭を倒し、現代に戻ってきた沢田綱吉。ところが、今度は過去に飛ばされて今度は1800年前の中国！？「しょうがねえな、とりあえず戦争起こすか」「ええええええ！？」「冗談だ、このバカツナ！」「そんなこんなでファミリー丸ごと飛ばされてしまったツナがとる道とは・・・ここに三国志の外史の外史、来る！！！！

この作品に嫌悪感を感じる方、REBORNと恋姫は絶対に別々

第1弾 三国志、来る！（前書き）

さて、ついにこのジャンルにも手を伸ばした
トーシロなぐぎゆるです

暇つぶしにとろとろと進めていきたいと思ってますので
暇があれば見てください

第1弾 三国志、来る！

「え〜つと……」

困り顔で口を開いたのは主人公『沢田綱吉』さわだつなよし
云わずと知れたボンゴレファミリーの？世……十代目である
本人はその事実を否定している。炎の属性は全てを包み込む『大空』

「なんで……みんながここにいるの？」

いま、並盛中学のツナのクラスに守護者全員と仲のいい女子二人が集まっていた

「俺と野球バカ、芝生頭に笹川はこの生徒ですから最初からいま
した

珍しく雲雀までいますがね」

少し棘のある喋り方をする銀髪のこの少年は『獄寺隼人』ごくうじゆんぢんと
ボンゴレファミリーの嵐の守護者である

皆にきついが、ツナには微妙に甘い
二つ名は『スモークン・ボム』炎の属性は荒々しく吹き荒れる疾風の『嵐』

「ははっ、そーだな、んでハルはなんでここにいった？」

優しそうな風貌の彼は『山本武』やまもとたけし

ボンゴレファミリーの雨の守護者で時雨蒼燕流継承者

ボンゴレファミリーのムードメーカーである

炎の属性は全てを洗い流す恵みの村雨の『雨』

「私は京子ちゃんとお話をしに来たんですよ！」

ポニーテールの彼女は『三浦ハル』みづら

緑中に通う意外に頭のいい女の子

将来の夢はマフィアのボス（ツナ）の妻

「そっだよ お兄ちゃんは何しに来たの？」

ほんわかとした雰囲気の彼女は『笹川京子』ささがわきょうこ

ツナ曰く、太陽のような眩しい笑顔が魅力

天然ボケな面があり、人と感覚がずれたところがある

「俺は極限にツナに会いに来たのだ！雲雀は何でここにいるんだ？」

鼻の絆創膏が特徴の彼は『笹川了平』ささがわりょうへい

ボンゴレファミリー晴の守護者で、ボクシング部主将
座右の銘は『極限』である。獄寺と意見が合わずに何度か衝突して
いる

炎の属性は明るく大空を照らす日輪の『晴』

「僕は校内の見回りの途中だよ……それより、他校の制服を着た
君が、並中に何の用かな？」

何者も寄せ付けない雰囲気を放つのは『雲雀恭也』

ボンゴレファミリー雲の守護者で、並中風紀委員

常に一人を好み、群れる事に嫌悪感を示す。口癖は「咬み殺す」

炎の属性は何者にもとらわれず我が道をいく浮雲の『雲』

「私は……ボスと……みんなに会いに来ただけ……君は
？」

物静かな彼女は『クローム髑髏』

ボンゴレファミリー霧の守護者

未来で京子達と仲良くなつてからはよく会っている

炎の属性は実態のつかめぬ幻影の『霧』

「ランボさんはねえ、ツナと遊ぶ約束をしたの？」

能天気そうなこの子供は『ランボ』

ボンゴレファミリー雷の守護者で、ボヴィーノファミリーの殺し屋から出世(?)した
どこにでもいる腕白な5歳児で、よく周りを困らせている
炎の属性は激しい一撃を秘めた雷電の『雷』

「ランボは大人しく家で待ってるって言っただろ!？」

「まあまあ、いいじゃねーかツナ」

「まったく・・・でも、みんながここに集まってるなんて・・・
なんかの前触れかな？」

「そうかもな」

振り向くと、窓にスーツを着た小さな赤ん坊が立っていた

「リボン!!」

「ちやおっす」

彼の名は『リボン』

アルコバレーノの一人で黄色のおしゃぶりを持っている
次期ボス候補のツナを鍛えるためにやってきた凄腕の殺し屋
好きな飲み物はエスプレッソコーヒ

「君が出てくるとなると・・・何かあるのかい？赤ん坊」

「いや、それは俺にもわからねえ」

「なんだ、わかんないのか……」

ツナが机に突っ伏したとき異変は起こった

ツナと守護者のボンゴレリングが突如、眩い光りを放ち始めた

「うわ！な、なに！？」

「眩しすぎる……これじゃ何もわからねえ！」

「ツナ君！」

「ツナさん！」

京子とハルが服の裾を掴んだところでツナの意識は途切れた
そして、次に目覚めたところは……

何も無い荒野だった

第1弾 三国志、来る！（後書き）

次回は曹操の登場です（早ッ）

第2弾 曹操、来る！

「・・・ナ・・・ん」

ん・・・俺を呼ぶのは・・・誰？

「ツ・・・君」

聞き覚えのある声・・・この声は・・・

「起きやがれ！バカツナ！」

どげし！

「ぎゃああー！！！」

「ツ、ツナ君・・・大丈夫!？」

「いつつ・・・だ、大丈夫」

心配してくれている京子ちゃんに笑みを浮かべて答える俺

「お兄ちゃん・・・大丈夫かな？」

「心配すんな、未来でも生き残ってきた奴らだ
そう簡単にくたばったりはしねえぞ」

「リボーンの言うとおりだよ、京子ちゃん」

「ありがとう、リボン君、ツナ君」

ニコリと笑みを浮かべる京子ちゃん
こんな時だけど、やっぱり癒されるなあ

「ん・・・ボス・・・？」

「は、はひ！？こ、ここはどこですか！？」

「クロームとハルも気がついたんだね！大丈夫？」

「私は・・・大丈夫・・・」

「ハルも大丈夫ですよ！」

「よし、全員目を覚ましたところでこれからどうするか決めるぞ」

俺達はその場で円陣を組み、座る

「まずは何といても情報だ」

「うん、ここがどこか知りたいし」

「山本君や獄寺君達の居場所もわかるかもしれないもんね」

「ツナ、それまではお前が京子と八ルを守らなきゃなんねえ・・・
出来るな？」

「うん、絶対に守るよ!」

「よし、なら行くぞ・・・ってもこれじゃどこに行ったらいいかわ
かんねえな」

さすがのリボンもお手上げ状態だ
歩いてたらどこかにはたどり着くんだろうけど・・・
それまでに京子ちゃんたちが持つかわからない
どうすれば・・・

「へへ・・・そこのガキども、いいもん着けてんな？」

不意に掛けられた声に振り向くと、三人の男が立っていた

一人は中肉中背の中年の男

一人はそれよりも小柄な男

一人はそれよりもはるかに大きな太った男

あまりいい育ちではないようで、三人とも頭に黄色い布を巻いている

「いいもんって・・・これのどこが・・・」

俺は自分の服を見る。それは制服じゃなく、パリッとしたスーツ
未来で白蘭との『チョイス』のときに来ていたスーツ

「ええええええ！？なんで!？」

「それはわかんねえが、お前以外は起きたときにきづいてたぞ」

「そ、そうなの?」

京子ちゃんとハル、クロームは同時に頷く

「とりあえず、身ぐるみ脱いで全部置いていけや、その女もな」

「まだガキだけど、中々に上玉ですぜ、アニキ」

「い、痛い目に逢いたくなかったら・・・さ、さっさとするんだな」

まさか、こんなところで強盗に会うなんて・・・

「リ、リボーン……」

「めんどくせえ……一気にたたん……」

「待てえい!!!」

その場にいた全員が辺りを見渡す

「あ、あそこです!」

ハルが指差したそこには変わった風貌の女が立っていた

「武器持たぬ庶民相手に襲い掛かるとは……言語道断! よって、この私が相手になろう!」

「な、なんなんだ!? てめえは!」

「下賤如きに名乗る名はない!」

そう言うなり、女の人が飛翔した、その次の瞬間には太った男を保持っていた槍の柄で打ち倒していた

そして、身を翻しては小柄な男を刃より下の部分で薙ぎ払う

「ちっ……さすがに分が悪いか……おい! 逃げるぞ!」

中年の男が太った男を蹴り起こし、太った男が小柄な男を抱えて逃げていく

「ふん・・・なんと歯ごたえのない・・・」

「さすがは星ちゃん、お見事なですよー」

「ええ、私も同感です」

戦闘が終わったのを見計らったことなのか
小さい女の子としっかりした感じの女性が出てきた

「ところで、怪我はありませんでしたか？」

「あ・・・はい、大丈夫です・・・ありがとうございました」

助けてくれた三人に向かって軽く頭を下げる

「いえいえ、風は何もしていませんよー」

「ええ、私も何もしていません・・・ところで、旅のお方ですか？」

「はい。それで、少し道に迷ってしまって・・・この近くに町はな

「いのですか？」

京子ちゃんの問いに答えたのは『星』と呼ばれる女性だった

「それなら、ここからずっと南に向かうと小さな町があるそこで休まれるがよからう」

「「ありがとうございます！」」

ハルと京子ちゃんが一斉に頭を下げる
それを見た三人は苦笑して

「中々、礼儀の正しい方ですね」

「そーですねー」

「うむ」

「そうだ！今度会ったときにお礼しますんで、名前を教えてください」

「いいだろう、私は趙雲。性は趙、名は雲、字は子龍だ」

「私は程立ですよー」

「私は戯志才と名乗っております」

「……趙雲……どっかで聞いた事があるような？」

リポーンを見ると、真剣な表情で相手を見ている

「む……？」

「これは……」

「どつやら、官軍のおでましですねー」

三人の視線のほうを見ると、なにやら大軍がこちらにやってくる
……なんか、嫌な予感が……

「では、我等は行かなければならないゆえ、ここで失礼する」

「ではまた、いずれ」

「またあいましょー」

三人はあっという間にこの場から立ち去った

「何だっただんたろう？リポーン」

「どつやら、おかしい世界に来ちまったのかもしれねえな」

「どういうこと？リボン君」

「さっき、趙雲って名乗ってたが、そいつは三国志の世界の人間だしかも、趙雲は男だったはずだぞ」

「はい！ハルもおかしいって思いました！」

「………時間移動……？」

「それだけじゃねえ……恐らくまたパラレルワールドに来ちまったかもしれねえ」

今度は1800年も過去の世界にな」

「……パラレルワールド」

「そろそろ、大軍の先陣がここに来るはずだ、あんまり余計な事は喋るなよ」

「う、うん」

頷いて、暫くしないうちに、馬に乗った女性が二人
その後につづいてそろそろと騎馬が俺達に周りを取り囲んでいく

「華琳様……」

「もしかして……これかしら？」

「その様かと」

黒い髪的女性と青い髪的女性に何となく態度がでかい女の子に釘付けになった

三国志の世界ならば、彼女達もどこかの武将か偉い人なのだろう

「……………取り合えず、連れて行くわ」

「はっ！」

「申し訳ないが、わが居城まで来てもらおう、そこで詳しい話を聞く」

「どうやら、根城まで連れて行かれるらしい……………まさか、尋問とか!?」

「ツナ君……………」

「ツナさん……………」

「ボス……………」

「ツナ、お前が決める」

「……………わかりました、行きます」

ここで断る理由もないし……断って斬られることになつたら大変だ

「その代わり、女の子は馬に乗せてあげてください」

「……いいだろう、姉者、騎馬を3騎連れてきてくれ」

「わかった」

「……お前はいいのか？乗らなくても」

「俺はいいですよ、歩いていきますから」

「ほう？ここまで相当あるぞ？大の大人でもたどり着けるかどうか」

「……やっぱ乗せてください」

「クス、素直な男は嫌いではない。後ろに乗れ」

「はい、リボンも乗れよ」

「おっ」

俺が青い髪の女性の後ろに乗ったところで、大軍が帰路につくために動き出した

陳留

華琳の居城 玉座

「さて・・・着いて早々で悪いけど、あなたたちのこと話してもらおうかしら？」

「リボン・・・」

「ここまで来たんだ・・・はなしちまってもいいだろう」

「・・・わかった」

俺はこれまでのいきさつを話した

俺達が1800年後の人間である事を

そして、仲間が恐らくこの世界に来ている事も

「・・・信じがたいわね」

「・・・しかし、嘘をいっているようには見えませんが？」

「どつする？やはり尋問か？秋蘭」

「春蘭、それは早計よ・・・もう少し様子を見ましよう」

「・・・では、お前達が未来から来た証拠を見せてもらおうか」

秋蘭と呼ばれる女性が高らかにそう告げる
が、よくよく持っているものは携帯やらノートなどだ証明になるか
どうか

「そのまえに、お前らの名前を教える」

「ん？」

「ちよっ・・・リボン！」

なんて事だ！名前を聞くならまだしも
何でそんな偉そうな態度なんだよー！！？

「貴様！華琳様に向かって何という口の利き方だ！」

「春蘭・・・抑えなさい」

「は・・・っ」

「すまないな、俺はこんな喋り方しか出来ないんだ」

「構わないわ、私は曹操。性は曹、名は操、字は孟徳よ」

「私は夏侯淵。性は夏侯、名は淵、字は妙才だ」

「くっ・・・私は夏侯惇！性は夏侯、名は惇、字は元讓だ！」

「・・・やっぱりだ」

三国志をあまり知らない俺でも曹操は知っている
確か・・・

「三国志の中でも曹操といったら魏の太祖だな
俺もあんまり詳しい事はしらねえが、建安文学の担い手の一人で
曹丕・曹植と並んで『三曹』って呼ばれてんだぞ」

「へえ・・・そうなんだ？」

「ああ。確か歩出夏門行の志在千里の一節は有名だぞ
確か

『老驥伏櫪、志在千里』

「驥」は一日千里も走るといわれる駿馬

「櫪」は馬屋のことだ。千里を走った馬は、老いて馬屋に伏してい
ても、志だけはなお

千里の彼方に馳せているものだって意味だと言われているんだぞ」

相変わらず、リボンって何でも知ってるんだな

「・・・華琳様」

「・・・ええ、あの詩はこの間浮かんで書き留めたばかり・・・この時代の人間なら、絶対に知らないはずよ」

「ということは・・・未来から来たってことか？」

「そういうことだな」

「どうだ？お眼鏡にかなったか？」

「ええ、どうやら嘘はついてないようね」

「どうやら、お前達は、天の御遣いのようだな」

「・・・天の御遣い・・・？」

クロームが首を傾げて鸚鵡返しのごとく聞き返す

「最近になって出てきた有名な噂よ」

『天より流星とともに現れたる御遣い、その炎の力を持って、戦乱を収め安寧をもたらす』

「つてね」

炎・・・？まさか、死ぬ気の炎！？

「なるほどな・・・その天の御遣いとなった俺達がこの戦乱を収めるために遣わされたのか」

「・・・正直、そんな風には見えないんだけど？」

曹操さんの言う事もわかる・・・

男は俺とリボンだけ

女の子で戦えるのはクロームだけ・・・
とても戦乱を収められるとは思えない

「まあ、明日、夏侯惇と一戦交えさせてくれるなら・・・ツナの強さを見る事が出来るぞ」

「・・・面白そうね、春蘭！」

「はっ！」

「では、明日・・・春蘭と・・・そういえば名前を聞いてなかったわね」

「あ・・・ツナです、沢田綱吉」

「綱吉・・・変わった名前ね。んんっ！明日、練兵場で模擬戦を行う。二人は遅れないように」

「はっ！」

「は、はい・・・」

「・・・・・・・・後ろの四人の名前も聞いておこうかしら？」

「私は笹川京子です」

「はい！私は三浦ハルと申します！」

「・・・・・・・・クローム髑髏・・・・・・・・クロームって呼んで」

「俺はリボンだ、よろしくな」

「京子にハルにくろーむ・・・・・・・・にりぼん？りぼーんね」

満足そうに頷く曹操さん

「あ、そうそう・・・綱吉が負けたら京子とハルにくろーむは私がいただくからそのつもりで」

「え？」

俺は一瞬思考が止まり

第2弾 曹操、来る！（後書き）

次回ハイパーツナ見参！

第3弾 模擬戦、来る！（前書き）

この話、かなりオリジナル路線かも？

「これまでのあらすじ」を聞きながら執筆でしゅ（噛んだw）

わからない方は、ググッてみて

第3弾 模擬戦、来る！

朝

曹操の居城 練兵場

私、夏侯元讓は華琳様の命で模擬戦を行うため練兵場で昨日やってきた

謎の未来人を待っていた。見た限り、5人の中では戦闘訓練を受けているものは
ひ弱な男と黒髪の大人しそうな少女の二人だけだそれでも、私と比べるまでもなく弱いと感じた

天の御遣いにしてもそれほど知識があるとは思えない
あるといえば、一番小さい赤ん坊のような男だ、確かりボンとい
ったか？

因みに、華琳達はリボンとクロームの名前を何度も繰り返し、ま
ともに言えるようになってい
涙ぐましい努力である

他の4人はあまり見えそうにないが・・・
男を除けば、他の三人は中々の美少女であったからな

そつごうしているうちに、練兵場の扉が開く

「……………来たか」

戦うべき相手が……手に不思議な手編みの手袋を身に着けて

「待たせたな！」

開口一番、リボンが口を開く

曹操さんは別段気にしてない様子で「私も来たところよ」といった

「ツナさん！頑張ってくださいね！」

「ボス……………勝って……………」

「ツナ君……………無理しないでね」

「うん、みんなありがとう」

「ツナ！今回は模擬戦だ……とはいえ夏侯惇は三国志でも名の知

れた武将だ

一筋縄では勝てないだろう、策はあるのか？」

「わからない……でも、俺は京子ちゃんを……みんなを守るだけだ！」

「フツ……忘れてねえようだな……なら行って来い！」

俺はみんなに声援に励まされて相手が待つ仕合場に向かう

「悪いが華琳様の前で負けてやるわけにはいかんぞ？」

俺は、『死ぬ気丸』を二つ服用する

私は、幻覚でも見ているのか？

目の前のひ弱そうな男が何かを飲み込んだ、その刹那
額に炎がともし、手編みの手袋は、黒く甲の部分に何かがついた手袋
何より一番変わったのは……相手自身だ

「負けられないのは俺も同じだ……夏侯惇」

目付きが違う。幾つもの修羅場を潜り抜けた戦士だけがなせる目付き
……ふふ、久しぶりに楽しめそうだ

「準備はいいようね……では、模擬戦開始！」

「はあああああっ！！！！」

開始の合図と共に私は目の前の男に向かって突進、幅広の刀、七星
餓狼いがろうを振り下ろす！
だが……それは想像を超えた結果になった

ガシッ！

男は難なく、刀を受け止めた

「なんっ……だと!?!」

「行くぞ」

小言のように呟いた刹那、その場から消え去る男
その事実には驚く私は、ありえない事にその場で一瞬硬直してしまった

「終わりだ！」

「なっ……!？」

声に気づき、振り向いた時はすでに遅く

私は男の掌底を背中に喰らい、吹っ飛び……壁に激突した

「ツナ君……凄いね」

「そうですね、ツナさんベリーストロングです！」

「……でも、本気になってない……」

「だな……本気でやったら相手が消し炭になっちまう」

私はその言葉を聴いて……少しだけツナ君が怖くなった
いつも優しいツナ君がそんなことするはずがないのに……

「どうかしましたか？京子ちゃん」

「うっん、何でもないよ」

我に返って、ツナ君を見たときにそんな悩みなど吹き飛んだ
だってツナ君の微笑みがそんな事はないって言ってる気がしたから

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は、砂煙を眺めていた

これ以上、立ち上がらないでくれ・・・そう願いながら
だが、その願いは無常にも、破られる

ドオオンッ！！！！

轟音と共に、夏侯惇が飛び出してきた

「ククク・・・やるではないか・・・だが！」

そのまま飛び上がり、繰り出す斬撃を腕をクロスさせて防御する

「……………クッ」

死ぬ気の炎を纏わせて防御したため、傷はつかないがそれでも、先ほどとは比べ物にならないほど重い一撃
俺は、上段に蹴りを放ち、相手が回避すると同時に間合いを開ける

「……………終わらせる」

指に嵌めたもう一つのリング
ライオンの顔がかたどられたリング、『アニマルリング』が光る
そこに現れたのは……

「ガアアウ！」

一匹の小さい炎のたてがみを纏ったライオンが現れる

「天空ライオンVer.V」（レオネ・デイ・チエーリ バージョ
ンボンゴレ）

これが俺のボックス兵器で、相棒だ

右手を振り下ろした刹那、眩しいほどの光りが辺りを覆う

「春蘭！」

「姉者！」

辺りを静寂が包む

そして現れたのは・・・夏侯惇の顔の横の地面を陥没させているツナ
ナの姿

「フン・・・やるな、ツナ」

リボーンの呟きに笑みを零せば身体をどかせ

「俺の勝ちだ」

そう高らかに言い放ち、戻ったナッツをボックスに戻す

「クツ・・・まだ・・・！」

「やめなさい、春蘭」

「華琳様！？し、しかし・・・」

「・・・今の一撃、威力を弱めて、わざとはずしたわね？綱吉」

「ああ・・・俺は人殺しは趣味じゃないからな」

そう言い放つと、興味深そうに俺を見てくる曹操

「・・・あなた、面白いわね・・・よかつたら、暫くここに留ま
てはいいかがしら？」

「何？」

「その強さ、不思議な技に炎を纏った人間・・・天の御遣いにびつ
たりだわ」

「待て、俺は戦争に参加する気は・・・」

「あら、別に人を殺せとは言っていないわよ？」

それにここを出て、宛があるのかしら？仲間の情報は？路銀にした
ってそう、一文無しでどうするの？」

「・・・」

確かに、曹操の言う通りだった

ここを出て皆に辛い思いをさせるわけにはいかない・・・

「リポーン」

「ボスはお前だ、お前が決めるんだ」

「……わかった、世話になる」

「ふふ、では秋蘭に五つ部屋を用意させるわ……その前に真名をあなた達に預けるわ」

「真名？」

「『真の名』と書いて真名……本人が心を許した証として呼ぶことを許した名前よ」

「……いいのか？まだ出会ったばかりだが？」

「構わないわ、極悪人にも見えないし、仮にそうであったならば、そのときに全員殺すまで」

「さすが曹操、噂に違わない霸王ぶりだな」

リポーンの発言にクスクスと笑みを浮かべてから

「私の真名は『華琳』^{かりん}よ、これからはそう呼んで」

「……よろしいのですか？」

「ええ、春蘭と秋蘭も許可してあげなさいな」

「はっ、私、夏候淵の真名は『秋蘭』だ、よろしくな」

「……私、夏候惇の真名は『春蘭』だ」

若干、ぶすつとした春蘭をみて苦笑し

「ああ、改めて、よろしくな」

微笑みながら頷く

(ちょっと……なんて顔で微笑むのよ……まったく//////)

(う……む、これは……なかなか//////)

(こやつ……こんな顔もするのか……むう//////)

一様に黙り込んでしまった三人を見て、声を掛けてみる

「あ、あの……どうかしましたか？」

「な、何でもないわ！馬鹿者！」

何でか、わけのわからない言いがかりをつけられては拳骨を喰らってしまった

(な、なんでこうなるんだよ)

「んんっ・・・じゃ、明日から仕事を任せるから、頼むわね・・・
秋蘭、部屋まで案内させてあげなさい」

「はっ、ではついてきてくれ」

(これから・・・どうなるんだろう？皆、無事だといいけど)

そんな事を考えながら錬兵場を後にした

第3弾 模擬戦、来る！（後書き）

なんか・・・ぐだぐだじゃなあ

他の守護者については・・・黄巾の乱までには出します

次回は毒舌少女襲来です

第4弾 猫耳軍師、来る！

朝

曹操の居城 ツナの部屋

朝、眩しい朝の日差しの中、俺は目を覚ました

「ふああ………」

「やっと起きやがったか、ねぼすけツナめ」

「おはよー、リボーン」

実は、リボーンにも部屋が宛がわれたんだけど

『俺はツナの家庭教師だからツナと同室でいいぞ』

と言ったので、リボーンと相部屋になった

まあ、京子ちゃん達と相部屋になるよりはいいかな？

それはそれで嬉しいんだけど・・・寝れなくなりそう

「そろそろ華琳の所に行くぞ、お前の初仕事だからな」

「う、うん・・・リボンもなにかするの？」

「俺はお前のかてきよーなんだ、それ以外やることはねえぞ」

(うわ、きつたねー・・・サボる気満々じゃん)

「うるせーぞ！文句があるなら俺以上の男になって見やがれ」

そついいながら俺の顔を蹴り飛ばす

「いってー！なにすんだよ！？」

「文句ばかり垂れるからだ」

「ていうか、さりげなく人の心読むのやめろよなあ」

俺も、これ以上は蹴られたくないの、いらつく心を何とか静める

「おはよ ツナ君、リボン君」

「おはよーございます！ツナさん、リボンちゃん」

「・・・おはよう・・・ボス」

皆と合流し、俺達は華琳さんの待つ玉座に向かった

玉座の間

「集まったわね・・・では、あなた達の役割だけと
後ろの三人は女官として働いてもらうわ」

「女官・・・っていうのはここに住む人たちの身の回りの世話を
するでいいんですか？華琳・・・さん」

「ふふ・・・華琳でいいわ、京子
簡単に言えばそうね、最初から厳しくはしないけど
ある程度はこなしてもらおうから、そのつもりで」

「「は、はい！」」

「あ・・・あの・・・」

快活に返事をする京子ちゃんとハルの横で
小さな声でおずおずと手を上げるクローム

「なにかしら?」

「私も……ボスと……戦う」

「ちょっと待って、昨日から気になってたんだけど
ボスって……綱吉の事?」

「……うん」

コクリと頷くクローム

「ツナは『ボンゴレファミリー』の十代目なんだぞ」

「その、ボンゴレ……何たらってのはなんなんだ?リボーン」

「ボンゴレファミリーってのはボンゴレ?世フリーモが作った自警団が元にな
ってる組織で

そのボンゴレ1世らいそんの来孫らいそんがツナなんだ
因みにツナはボンゴレ十世……?世デーチモだな」

「ほう……結構な歴史があるんだな」

「みたいね……で、クロームは戦えるのかしら?」

「それは俺が証明します。いろんな戦いで一緒に戦ってきたから」

「へえ……その力、少しだけ見せてもらっていいかしら？」

「……………うん」

そう言って目を閉じるクローム

三叉の槍を頭上で回転させて、床に柄の先端を叩きつけると

ドゴオオオン！！！

あらゆるところから火柱が立ち上る

「なっ！？」

「こ、これは……………！」

「うわっ……………あ、熱い！」

華琳と秋蘭は驚き、春蘭は服についた火を消していた

「ク、クローム！もう……………いいよ」

「・・・わかった、ボス」

目を開き、頷けば火柱は消え

火柱が出ていたところは何もなかったようにきれいだった
春蘭の服についた火も消えて、服も燃えていない

「こ、これはなんだ！？よ、妖術でも使ったのか！？」

「これも、ツナと同じ『死ぬ気の炎』だぞ」

「・・・・・・・・綱吉が纏っていた炎の事ね？」

「ああ、死ぬ気の炎はもともと7属性あって

『大空』

『嵐』

『雨』

『雷』

『晴』

『雲』

『霧』

があるんだ。ツナは大空で、クロームは霧だな」

「因みに、効果はなに？」

「大空は『調和』で周囲にある物体や地形に同化させる効果を持つんだ

近くに物体があれば石化もできるぞ

調和自体が炎でできているゆえに炎と同化させることも可能だぞ。

属性随一のスピードを誇っているぞ

霧は『構築』で分身を作りだしたり、存在するものを隠したりできるぞ

クロームは元々幻術士だから、クロームの幻術をさらに強力にしたりもできるぞ」

「なるほどね・・・さっきのは幻術だったのね」

「うむ・・・驚いたな」

「・・・燃えるかと思っただぞ」

「わかったわ、クロームと綱吉は・・・一応武将として使うわ・・・人も少ないし」

「わかりました」

「・・・わかった」

俺とクロームは頷いて了承した

「曹操様！」

勢いよく扉が開かれ兵が転がり込んできた

「何事かしら？」

「近隣の村々が盗賊の襲撃に遭い、壊滅状態に！」

（なんだって！？早く行かないと……！）

「数は？」

「およそ、三千かと！」

「すぐに出立の準備をさせなさい数は……五千もいれば十分ですよ」

「わかりました！」

そう言って、兵はそれこそダッシュで玉座の間を出て行った
……かなり、まずい事態になっているようだ

「では、各人は準備が整うまで休んでていいわよ」

その華琳さんの一言でこの場は解散となった

「・・・・・・・・・・暇だなあ」

俺は部屋に戻ってからベッドに寝転がっていた
っていうか、ベッドあるんだ・・・この世界

「暇なら誰かと話してきたらどうだ？」

「・・・・・・・・そうだなあ・・・この時代の人ともう少し仲良くはな
りたいしそうするよ」

「時間までには戻って来るんだぞ」

「わかった」

俺は部屋を出て、辺りを散策してみる
途中、女官の人と会っては物珍しさからいろいろ話しかけられた
そして今は玉座の間の扉の前にいる
扉を開けて中に入ると、華琳さんがいた

「あら・・・まだ時間じゃないわよ？」

「ちよっと・・・散策してたんです」

と、華琳さんがクスリと苦笑いを浮かべて

俺は駆け足で玉座の間から立ち去った

「え〜っと・・・監督官さんはっと・・・」

馬具の準備をしているところでは
みんな忙しそうに動き回っているのでも話しかけられる状況じ
ゃない

(まいったなあ・・・)

辺りをきよろきよろと見渡していると
立って何かをしている人を見つけた
それは、なんだか猫耳のついたフードを被った少女だった

「あの子に聞いてみるか・・・あの〜」

「・・・」

あれ？俺無視された？

こんなにナチユラルに無視されるなんて・・・凹みそう
んん・・・気を取り直してもう一度

「ねえ、ちよつといいかな？」

「何？今、忙しいんだけど！？」

（お、怒られちゃったよ・・・出撃前だから神経質になっているんだ・・・）

とはいえ、こちらも華琳のお達しである

忙しいからといって、はいそうですかというわけにはいかない

「えつと、糧食の最終点検の帳簿を渡して欲しいんだけど？」

「はあ？何でアンタなんかに渡さないといけないのよ」

ま、まあ・・・まだ華琳が持ってきてって言ってないから・・・だよ
よね？

「え、えつと・・・華琳が持ってきてくれてって言う・・・」

俺は、再び駆け出した、玉座の間に

その後に戦慄が待ち受けているとも知らずに

第4弾 猫耳軍師、来る！（後書き）

自分は一回だけしか真・恋姫（魏）をやってないのでなにか
おかしいなと思ったら一言ください

次回は大飯ぐらいが登場でさw

第5弾 天真爛漫、来る！（前書き）

第5弾 天真爛漫、来る！

曹操の居城

玉座の間

「華琳、持って来たよ・・・糧食の帳簿」

「ありがとう」

俺は玉座で待っていた華琳に帳簿を渡す
初仕事にしてはパシリみたいな感じだったが

（自分で言い出したことだし・・・ま、いつか）

そんな事を思いながら華琳を見ると
さつきからページを捲ってない
しかも、怒っている・・・いや、これは殺気だった

「・・・・・・・・・・綱吉・・・・・・・・これ、見た？」

「み、見てない・・・・・・・・けど？」

（ちよ・・・・・・・・その殺気怖いから消してー！）

何て思っても消えるわけもなく
俺はその殺気にただただ震えた

（十年後の雲雀さんより凄いかも・・・・・・・・）

「誰か、この帳簿をつけた者を呼んできなさい。春蘭と秋蘭
・・・・・・・・それからクロームも呼んでおくように」

「はっ！」

華琳が言うなり、二人ほど兵が飛び出していった

「綱吉、これ・・・・・・・・見てみなさい」

「う、うん・・・・・・・・」

帳簿の問題のところを見ると

「……………わ、わかんない」

この場の全員、それこそ華琳ですらずっとこけた

「あ、あなたねえ……………」

「勉強がたりねーぞ！」

ドゲシ！

「ぎゃあああ！」

帳簿を持ったまま、リポーンに蹴飛ばされたしまった

「何すんだよ！」

「貸してみる」

そう言っつてリポーンは俺から帳簿を取り上げては勝手に読み始めた

「……………なるほどな」

「な、なんて書いてあるんだよ？」

「どうやら、予定の半分しか糧食を用意してねーみてーだな」

「ええ！？な、なんで!？」

「それは……本人に聞くわ」

厳しい表情でそういう華琳の怒りは収まっていないようだった

「華琳様！春蘭、秋蘭、クローム、ここに参上仕りました」

「ご苦労、ところで秋蘭、この糧食担当の監督官を登用したのはあなたよね？」

「はっ！先日志願してきた新人ですが、手際もよく、今回の糧食調達に充てました」

「帳簿を見てみて」

リボーンから手渡された帳簿を秋蘭さんと春蘭さんが見る
クロームは特に興味なさそうに横に並んでいた

「これは……予定の半分ほどこか用意されていない……？」

「……ダメなのか？」

この春蘭さんの言葉に、華琳や秋蘭さんが呆れたようにため息をつく

「えっと、半分しかないから、これだと予定の兵を連れて行くと片道分の糧食しかないから

確実に行き倒れになっちゃうから兵も半分に減っちゃうってことじゃないんですか？」

「う、うるさい！それぐらいわかっているわ！」

(ええ)・・・説明したら怒られちゃったよ)

「・・・春蘭はこれだからともかく・・・綱吉はよくわかったわね？」

「華琳様！？あんまりですよ・・・」

春蘭さんは座り込んで凹んでしまった

「何となくこうなるんじゃないかなって・・・思っ

「ツナは『超直感』の持ち主だからな！」

「・・・直感力が人並みはずれているということ？」

「ま、そういうことだな」

納得した華琳を見て、頷くリボーン
リボーンと華琳が話している間に
春蘭さんは秋蘭さんに慰められていた

「リボーン……これ、何となくわざとな気がするんだけど……」

「だろうな……でなきゃ相当な無能だ

秋蘭が出来ると思込んで任せただからな……」

となるとこいつは……とリボーンが呟いたところで
件の監督官が兵と一緒にやってきた
その監督官は小さな女の子で、猫耳フードを被っていた

(……あの子が監督官だったんだ……てっきり監督官の部下かと思ってた)

「あなたが糧食の調達を？」

「はい。この量で問題ないと思いましたが……何か？」

「指定した量の半分しか用意できてないが……どういっつもりかしら？」

その言葉を発する華琳の表情は無表情

だが、その身から発する怒気からもわかるように怒っている

「・・・ツナ」

「何？」

リポーンが小声で話しかけてきたので俺も小声で答える

「華琳をよく見とけよ・・・人の上に立つ者同士、学ぶ事もあるはずだ」

「う、うん」

俺は、マフィアのボスになるつもりはなかったが
確かに何か学ぶことがあるかもしれないと思ったので頷いた

「先ほど申し上げました通り、これ十分と言ったのです」

「なんですって・・・?」

「もしよければ理由をお聞かせ差し上げたいと思いますが、よろしいでしょうか？」

食糧というのは人間にとって恐ろしく大切なものである

ツナ達がいた世界では、餓死などは時代的にほとんどいかなかったがここは三国志の時代なのだ、食糧を満足に取れずに栄養失調で餓死する民も多かった
ましてや、戦をする人間は何もしていない者より必要性が格段に増すのだ
それを蔑ろにしては戦など勝てない。それはいつの時代でも当てはまる事だ

(この子は・・・こんな事をしてどうする気なんだ？わかったら確実に華琳のところ呼び出されるのに・・・)

・・・呼び出される？

まさか、華琳に会うためにこんな事を仕掛けたのだろうか？

俺は、まだ残る謎を置いて、この少女と華琳の話に耳を傾けた

「・・・もし、ご納得いただけないのであれば・・・この首、如何様にしていただいても構いません」

「・・・春蘭！絶をここに」

「はっ！」

華琳は春蘭に自らの武器である死神鎌『絶』を手渡させる

その形は、命を刈り取るための形をしているようで、あまり好きにはなれない

俺は、落ち着いていた・・・何となくだが、彼女は『殺されない』

と思ったから・・・

「では、その論に少しでも矛盾があれば即、貴女の首を刎ね落とす。・・・では、述べてみよ」

「はっ！・・・輸送する糧食を減らす事により全体の行軍速度は格段にあがります
現在想定されている工程よりも大幅に行軍にかかる時間は短縮できます」

（なるほど・・・確かに荷物を多く持つていくと重いし、歩く速度も遅くなるけど

荷物が少なかったらそれに伴って歩くスピードも変わるって事か）

「ですが、行軍にかかる時間を抑えたところで賊の討伐に時間がかかってしまつては意味がありません・・・
が、私の策を用いてくだされば・・・確実に戦闘時間を遙かに短縮できます。この糧食の量でも足りるほどに」

そこまで言い終えた少女は突如として片膝を付き、右手で握りこぶしを作つて地面に押し当てる

「曹操様！是非とも、この苟？めを軍師として曹操様の駒としてお加えください！」

その言葉に、みんながそれぞれ驚いていた
仲間に加えて欲しいがためにこんな事をするのだ、俺でも驚いたぐ
らいだ

「なるほど・・・荀？といえば『王佐の才』と称えられた名軍師に
して忠臣・・・
でもまさかこんなガキとは思わなかったがな」

リボーンという言葉にジロリと荀？が睨み付ける
が、すぐにその視線を華琳に戻す

「あなたの言いたい事はわかったわ・・・
でもそれだけの事に、軍を掻き乱し・・・あまつさえその策を用い
よとは・・・」

・ 華琳が、荀？に歩み寄り・・・柄尻を持って・・・鎌を振り上げ・・・

「この上なく・・・あつかましい・・・！」

そのまま、鎌を振り下ろした

「っ・・・！！！！！！」

思わず、俺は身をすくめて目をつぶった

一瞬だが、その場の時間が止まった感じもした

・・・が、何も聞こえてこないので恐る恐る目を開けてみる

そこには微動だにしない荀？とその首に触れるか触れないかの位置で止まった鎌、そしてそれを持つ華琳

「・・・・・・・・何故避けない？」

「私には曹操様の刃を避けるほどの武技は持っておりませんゆえに・
・
何より、王に智を持って仕えるならば、過ちを犯したときには死をもって償うしかありませんので・・・」

荀？の顔には恐れ表情はまったく無い

寧ろ、それが当たり前だ。と言わんばかりに

それを見た華琳は、鎌を首から離す。そして荀？を改めて見る

「あなた、真名は？」

「桂花です」

「桂花、どうしてこのような事をしたのかしら？」

もしかしたら、本当に首を刎ねていたかもしれないわよ？」

「はっ・・・・・・・・曹操様は必ず、最後にはご自分で確認をすると聞き及

んでおりました

故に、糧食に問題があるとすれば、こうして、必ずこの場に責任者を呼ばれましょう

そこで私の言葉を必ずお聞きになります・・・それを聞けばたとえ刃を向けられようとも

私の首は刎ねられる事はありません」

「・・・確かに・・・そうだったわね」

「もし、それでも首を刎ねられれば・・・私が仕える王を間違えた・・・それだけの事です」

つまり・・・荀？は曹操と言う人物を試したのだ

仕える器たる人物かどうかを

華琳は笑みを浮かべて口を開く

「よろしい！桂花を曹操軍の軍師として迎え入れる！

桂花には私の真名を預ける。まずは賊の討伐を見事完遂して見せよ

「！

「はっ！

荀？は立ち上がり拳と掌を合わせ一礼する

「ところで、華琳様・・・一つご質問が」

「何？」

「あの者どもは何者ですか？」

順々に、リボン、俺、クロームを指差す

「彼らはこの間やってきた『天の身遣い』よ」

「い、このような者がですか!？」

俺はそう言われると・・・すこしムッとしてしまう

「すでに私の真名も預けてあるわ・・・」

綱吉達も桂花のことは真名で呼びなさい

「華琳様!？」

「これは命令だから、ちゃんと呼びなさいよ?特に綱吉はね」

「ええええ!？」

(な、何で俺だけ・・・?)

そう言いながら玉座の間を出て行く華琳を見送る

振り返ると、すでにリボンとクロームが自己紹介をしていた

「俺はリボンだ。よろしくな、桂花」

「私は・・・クローム髑髏・・・クロームでいいから・・・」

「二人とも変わった名前ね・・・で、アンタは!？」

なんで俺だけはこんなに口調がきついんだ？
そんな事を思いながら自己紹介をする

「俺は沢田綱吉・・・綱吉でいいから
ありゃー」

「ふん・・・私は荀？。性は荀、名は？、字は文若、真名は『けいふあ桂花』
よ

一応、よろしく」

よろしく、とは言ってくれたので

握手しようと手を差し出たのだが・・・

「握手はいいわ・・・なんかうつりそうだし」

(うつ・・・ほんとに心をえぐるのがうまいよ・・・)

その後、何故カリボンとクロームとは握手をしてその場を立ち去

つた桂花

「ありゃー重度の同性愛者だな」

「ええ？まさかあ」

因みにリボーンの言葉をまざまざと思い知るのは少し先の話である
そんなこんなで京子ちゃんとハルに少し話をしてから俺は賊の討伐
に参加した

「……ところで綱吉」

「何？華琳」

「その服装って何か意味でもあるのかしら？」

今着ているスーツを指差して問いかける華琳

「ボンゴレファミリーの起源が住民を守る自警団ってのは聞いたよ
ね？」

「ええ」

「その役割を果たすときに、この正装に身を包み
命を掛けて戦った……らしいよ」

「へえ・・・ボンゴレファミリーの伝統ってやつね」

「初代はそれを体現してたが、二代目からは人には言えないようなことも

やってきたみてーだけどな」

「だから俺はボスにはなりたくないんだよ・・・」

「そうなの？だったら貴方が変えればいいじゃない」

「そ、そうなんだけど・・・」

「ま、がんばりなさいな」

何故か励まされてしまった・・・喜んでいい・・・のかな？
春蘭さんなら「喜べ！」といいそうだ

「伝令！申し上げます！」

「申せ」

「先の偵察隊からの報告です

前方に戦闘と思しき集団を確認！その数は十数ほどかと！
鎧や武装が揃っていない為、脱走兵や賊の類かと！」

「そう・・・」

華琳は考え込み

「もう一度、斥候を送るわ・・・」

「無駄だぞ」

「え？」

「ツナが行っちまった」

「・・・まったく・・・春蘭、とりあえず追いかけて頂戴」

「はっ！」

「・・・・・・」

ツナは超死ぬ気モードになり

戦闘が起こっている地点に向かっていた

「・・・気配が近い・・・そろそろか」

戦闘集団を目視で確認した時

「でええりゃあああああああ！！！」

「！！・・・なんだ！？」

少女の声だが、およそそれとは似つかない
気合に入った声に驚いたツナ
そして、それに伴って飛んでいく賊

「・・・・・・とりあえず、助ける！！」

「はあっ・・・はあっ・・・」

「相手は一人だ！回り込んで後ろを取れ！それで終わるんだよ！」

「まだまだあ！ぜええええええい！！！！」

少女は大鉄球『いわだむはんま岩打武反魔』を振り回して
男の一人の頭蓋を潰す

「といつても……さすがにぎすぎるよお……」

その時、背後から男が迫る

「いただきだあ！！！」

「しまっ……」

男が振りかぶった剣は少女の身体を

「はあっ！」

ガキン！

切り裂く事はなく、ただ金属音が鳴っただけ
それはツナの拳で剣を弾いた音だ

「な、なんだてめえ！？」

「……無様だな……こんな子に大勢で襲い掛かるなんて」

「うるせえ！やっちまえ！」

男達が剣を、斧を振りかざし向かってくる

「あ、危ないよ！」

「大丈夫だ」

そう言うと、ツナは男達や、少女の前から消え去る

「な……ど、どこ行きやがった!？」

「……消えちゃった……」

「ぐあっ！」

全員が振り向くと、男を一人昏倒させた
ツナがそこにいた

「てめええええ！」

「ぶっ殺してやる!」

しかし、何故か怒っているようだが・・・

「どうした？」

「どうしたもこうしたもあるか！
勝手に飛んでいきおって」

「あ・・・すまなかった」

俺はそういつと春蘭に頭を下げた

「い、いや・・・そう素直に謝られると・・・何も言えんではないか・・・

とりあえず、華琳様にも謝っておくんだな」

「・・・わかった」

少し笑みを浮かべて頷く

すると、何故か顔を背ける春蘭
もしかして、嫌われているのか？

「賊はこの先に逃げた・・・もしかしたら討伐する賊の一部かもしれない」

「そうか！では、連れてきた斥候を行かせよう」

春蘭が命じ、斥候が先に道なりに進んでいった
そうしているうちに、華琳がいる本隊が到着した

「綱吉・・・あなたねえ・・・」

勝手に飛び出したりしたらダメじゃないの」

「すまない・・・華琳」

「これだから男は・・・」

「これからは気をつける」

「まあいいわ・・・で、この女の子は？」

「綱吉の話では、賊相手に一人で戦っていたとか」

春蘭がさっきの少女を連れてきた

）・・・なんだ？このもやもやした感じは・・・

まさかとは思うが・・・)

俺は一応、華琳のそばに待機することにした
この心配が杞憂に終わればいいが

「お姉さん達・・・もしかして国の軍隊・・・？」

「ええ、そうだけど・・・それがどうかしたかしら？」

「・・・・・・・・つ・・・・・・・・!!!!」

華琳が問いに頷くと、訝しげにしていた少女は
一転、表情を険しいものに变え、2、3歩後退し
鉄球を振り上げて、華琳に振り下ろす

「華琳様！」

華琳に鉄球が迫るも華琳は微動だにしない

ガシィッ!

華琳に当たろうかというところで
ツナが割り込み、鉄球を止める

「くっ……止めるんだ！」

「うるさい！」

ツナは鉄球を弾き飛ばし、その場に降り立つ
少女は鉄球を頭上で振り回し、遠心力を付けてこちらに打ち込んでくる

「……………」

ツナは、左手の掌を後ろに向け、右手だけで鉄球を軽々と止める

「ちよっ……大丈夫なの？あれ」

「ああ……私でもそうそう受けられないぞ？」

「何か秘密でもあるのか？リポーン」

華琳、春蘭、秋蘭が順々に言葉を並べる

「ああ、左手を後ろに向けてんだろ？
そこから炎を見えないように噴射してんだ

だから、後ろに行かないんだ。ま、鉄球で碎けるようなやわな鍛え方はしてねーからな」

「へえ……結構凄いのね、綱吉って」

華琳が感心したようにため息をつく

「止めるんだ……こんな事しても何にもならないぞ」

「うるさい！国の軍隊なんか信用出来るもんか！！僕達を助けてもくれないくせに、税金ばかり持って行って！！」

再び、鉄球を引き戻し、頭上で回転させる

「ボクが……ボクが村のみんなを守らなくちゃいけないんだ！盗賊からも……お前たち、役人からも！！」

そう言い放ち、鉄球を投げつける少女

「……そう……か」

ツナは納得したように呟き

向かってくる鉄球を叩き落とし、炎を纏わせた手刀で繋がれた鎖を焼

ききった

「ああっ!?!」

「お前の言いたいことはわかった……だが、話を聞かないのはどうかと思っぞ」

ツナはそう言って少女の頭を撫でる

「でも……!」

「静かになさい。貴女、名前は?」

「え……?あ、許?……です……」

「そう、私は曹操……ここから山向二つこの陳留と言つといるで刺史をしているわ」

「山向二つの……?……あ……それじゃ……」

どうやら、なにか勘違いをしていたらしい少女、許?は態度を翻した

「ごめんなさい!勘違いしてたみたいです……」

「気にしないでいいわ」

「噂で聞いてます！
山向こうの刺史さまは凄く立派な人で、悪い事はしないし、税金も安くなっただって……
でも、ボク、顔とか名前とか全然知らなくて
だから、その……前のお役人が逃げちゃって、また代わりのヤツが来たんだって思っただけ……」

なるほど……と納得したツナ
ここを治めていた役人が逃げてしまった
それは盗賊や山賊を放っておき、自分達だけ逃げたと言う事
そんな状況で国から役人が派遣されようと、国民は納得しないだろう

「まあ、代わりなのは変わらないけど」

「……華琳、この国は……どうなっているんだ？」

「見た通りよ……国は荒れ、こんな風に国の人間が賊を恐れて逃げ出すといったところがいろんなところで起こってるの」

「……そうか」

苦い顔をして考え込むツナ
それをみて苦笑する華琳

「それに、国が荒れてるなら……また立て直せばいいわ。……」

許？」

「は、はい！」

「この国を正すために、力を貸してくれないかしら？」

「え……っと……」

「報告します！」

桂花が走りこんできた。何かあったのだろうか？

「華琳様！斥候が戻りました。賊の本拠地はここから約八里の場所にある筈……ここからすぐ近くです！」

「わかったわ、許？……迷っているなら、せめてこの間だけでも……貴女の村を守るために力を貸してくれないかしら？」

「は……はい！それなら喜んで！」

どうやら、自分の村を守るといふ明確な目標ができた事によりやる気を出したようだ

「あ、あの……」

第5弾 天真爛漫、来る！（後書き）

次回・・・・・・クフフ

第6弾 骸、来る！

「えゝ・・・君の事は・・・許？つて呼んだらいいのかな？」

華琳率いる討伐隊はいま、敵の本拠地である八里先の砦に向かって行軍していた

八里は大体5km。とこまで遠くはない距離だが、それは現代での話この時代は舗装された道も少なく、急いでも30分はかかるであろう距離

歩きであれば相当に時間と労力を消費するのは目に見えているそこで、馬のない許？はツナの乗っている馬に相乗りさせて貰っている。このセリフはそのときのツナの質問だった

「え？季衣でいいよおゝ仲間なんだしさあ」

「ええ！？い、いいの？・・・真名なんですよ？」

あんまりにもあつさりと言名を授けられたツナは逆に狼狽した

「あら？良かったじゃない、綱吉」

「本人が良いといっているんだ・・・受け取ってもいいだろう」

華琳と、秋蘭にこつとも言われては、ツナも受け取るしかなかった

「わかった・・・ありがとな、季衣」

「はは、気にしなくて良いよ」

「私は知らないわよ・・・その男にあんな事やこんな事やされても・・・」

「え？そうなの？ツナ兄ちゃん」

「だああ！そんな事しないって！っていつか、変な事いうなよ、桂花！」

ツナが文句を言った瞬間、木片が顔に飛んできた
そして、それは見事ツナの顔面に直撃する

「ぎゃっ!?!」

「アンタなんか真名を呼ばれる筋合いはないわよ！もやし男！」

激昂した桂花があつとまくし立てる

因みに、もやし男とはひょろつとしていているように見えたからである

けして、どこかのエクソシストは関係ない

ついでに、季衣は綱吉の事をツナ兄ちゃんと呼んでいる

これは、綱吉様は・・・なんか偉そうというツナの言い分があったから

「いったあ・・・容赦なさすぎだつて・・・」

「あはは・・・ところで、ツナ兄ちゃんの生まれたところってどんなところなの？」

「あら、それは私も気になるわね」

「・・・まあ、聞いてあげなくもないわよ」

それぞれが興味深そうに聞いてきた

「そうだなあ・・・こことは全然違つところ・・・飢餓も貧困もない普通の世界

争いはあつたけど・・・それは遠い別の所の話だったから

でも、そんな生活はリポーンが来てからがらつと変わったんだ」

ツナは語つた・・・

家にリポーンが来て、マフィアの十代目候補だと知らされたときのこと・・・

六道骸が自分の身体を狙って襲ってきたこと……

同じファミリーのヴァリアーとリング争奪戦をしたこと……

未来に行って諸悪の根源であった白蘭と戦った事

簡潔にはあるが、今までの事を話した

「平和な時代にも争いはあるのね」

「綱吉が強いわけだな」

「……何も出来ないただのもやしではないのね」

「ちょっと、桂花、見直した感じでさらっと悪口を入れるの止めてくれない!？」

「嫌よ」

「即答!？」

がっくりとうなだれるツナ

クスクスと笑みを浮かべる華琳がクロームをみる

「貴女も、その霧の守護者として修羅場は踏んでるってことみたいね」

「は、はい・・・あ、でも・・・」

「ん？何？」

クロームが口を開こうとしたとき
そばの兵士が声を上げた

「曹操様！賊の砦と思しき建物を目視で確認しました」

皆が前を振り向くと

山の間に入り組んだところに見える少し老朽化した砦が見えた
空気が一気に締め、ピリツとした感じになるのをツナは感じた
本拠地が目の前なのだ、いやがおうにもそうならざるを得ないだろう

「ふう・・・緊張してきたあ・・・」

「俺もだよ・・・なんてったって大規模な乱戦なんて初めてだし」

現代でもツナは乱戦の経験数が圧倒的に少ない

骸たちが並盛に来る前に一度、何十人もの不良を獄寺や山本、雲雀

と共に退治したとき以来である

後は、一対一や、こちらが多数の一対多数しか経験がない

だが、今回は規模がまったく違う。敵は三千、こちらは二千

イクス・バーナー
『X BURNER』を撃つものなら確実に味方を巻き込むだろう

「おい、ツナ！」

「リポーン！」

「今回は場所が場所だ・・・X BURNERの使用は味方を巻きこまねーよう確実なところで決めろよ」

「わかってる・・・！」

力強く頷くツナ

それをみたりポーンは微笑し

「よし、なら大丈夫だな・・・怪我だけはすんじゃねーぞ」

そのまま後方に下がるリポーン

「・・・いくす・ばーなーってなに？ツナ兄ちゃん」

「え？技の名前だよ」

「ふうん、変わってるね、天の国の技って」

「はは……そろそろ、華琳のところにいこっか？」

「うん！」

ツナと季衣は歩き出す

その先には天幕が設営されており

中には少し豪華な椅子が一つ、それに向かい合うように七つの椅子が置かれていた

すでに七つの内五つは埋まっており、ツナと季衣は残りの二つに椅子に腰掛けた

もちろん、豪華な椅子には華琳が腰掛けている

「集まったわね……ではまず、賊の戦力だけど……」

「ここら辺に賊はあれだけだから……分かれてるってことはないです。多分、華琳様が探してる賊もあいつらで間違いないと思います」

「それなら、全戦力を傾けられるわね……数は三千と聞いているけど……？」

「はっ、およそ三千との報告を受けています」

「三千……」

「あら、怖気づいた？綱吉」

「そ、そういうわけじゃないけど・・・」

「なら・・・何？」

「・・・中にはこういうことをやりたくないけどやってる人もいるかもしれない・・・」

「そうですね・・・国がこれだもの」

「もし、降伏してきたら・・・たすけてもいい・・・かな？」

「・・・」

華琳は黙って考え込む

「甘いぞ！綱吉！例えそうであつてもやった事には変わりないのだ
！」

「で、でも・・・」

「静かに」

俄かに騒がしくなった会議を華琳がぴしやりと鎮める

「降伏してきたものは出来るだけ助けるように」

ただ助けるか否かはあなたたちの判断に委ねるわ・・・怪しいと感じたら、即斬り捨てなさい」

「はっ！」「はっ！」

「これでいい？綱吉」

「あ、ありがとう・・・華琳」

自分の意見を受け入れてくれた華琳に頭を下げる綱吉

「さ・・・そろそろ行くわよ、桂花、策を」

「はっ！」

華琳が桂花への発言を促す。皆の視線は彼女に向く

「まず華琳様には少数の部隊を率い、砦の正面に展開していただきます

その間に春蘭、秋蘭の両名が残兵を率いて後方の崖へ待機

華琳さまの本隊が盛大に攻撃の合図をすれば、誘いに乗った敵は必ずや出陣してくるでしょう」

「そこを、伏兵の我らが叩く・・・と」

「ちょっと待て、それでは華琳様を囿に使うということか!？」

「何か、問題が？」

「それでは華琳様が危険に晒される事になるではないか！」

確かに春蘭の言う事は間違っではない

前線に大将が出陣し、攻撃するとわかれば真つ先に狙われるのはその大将だ

「だが、策としてはいい線いってんぞ」

「な、なんだと？」

「元々、城や砦なんかを攻めるときには三倍以上の戦力で挑まなきゃなんねえ

だが、今回は戦力は敵のほうが上だ。力押しで行っても後のほうでジリ貧になっちまう

そうになると、無駄に戦闘が長引いて兵力の無駄使いになっちまう」

「う・・・た、確かに・・・」

「ま、今回は糧食もすくねえからな」

リポーンの言葉に興奮も冷めたらしく、納得したように頷く

「ま、華琳もダラダラと戦闘を長引かせるは好きじゃねえだろ？」

「そうね・・・敵が女の子だったら構わないのだけれど」

クスクスと笑みを浮かべる華琳をみて微笑するリポーン

「だが、ただ出て行くだけじゃただの的だ。そこら辺もちゃんと考えてあるんだろ？桂花」

「え、ええ・・・華琳様には隊の中でも精鋭の二百率いただきます

そして念のために、綱吉、クローム、季衣を部隊に配置します
万が一後退することになっても我が軍の錬度ならば確実に逃げ切れ
ましょうし

伏兵の突撃まで十分隊列を維持できます」

つらつらとこの策の有用性を語る桂花

淀みなく説明する桂花をツナは感嘆の表情で見ていた

「さすが、桂花だな。ツナとは頭の出来が違うぞ」

「ちょ・・・酷いよりポーン!？」

「あんなのと比べられるのは癪だけど・・・一応礼は言っておくわ、
リポーン」

「気にすんな」

たいしたことはないと言った感じで話すりボーンの横で
ツナはがっくりと凹んでいた

「・・・大丈夫？ツナ兄ちゃん」

「な、なんとか・・・はは」

ツナは乾いた笑いしか出せなかった

「では、これで行きましょう・・・各員、部隊の配置が完了次第、
作戦を開始するわよ」

「はっ！」

「それにしても・・・十分の一の戦力で戦うなんて・・・」

「あら、桂花の策が信用できない？」

「え？そ、そうじゃなくて、純粹に怖いんだ」

「・・・なら、ここから逃げ出す？」

その華琳の問いにツナは首を横に振った

「俺は・・・守るって決めたんだ・・・仲間を・・・大切な人を・・・だから怖くても・・・戦うんだ」

そう・・・未来に飛ばされた時に

「それで良いんじゃない？私は国を変えるために、春蘭達は私を守るために

戦う理由なんて人それぞれよ？」

「・・・そうだね」

ツナは死ぬ気丸を2錠飲み込む
即座にツナの額に炎がともる

「なら俺は、お前を守ろう・・・命を懸けてな」

「あら・・・いいの？」

「仲間だからな」

その屈託のない笑みに華琳は頬を染める

「バカ・・・其処は、お前が好きだからな・・・とかでしょ？普通」

「いや・・・俺にはもう好きな人がいるからな・・・」

その台詞と同時に銅鑼の音が鳴る

「・・・桂花、これも予測の想定内かしら？」

「これは・・・想定外ですね・・・」

「おい、どんどん来るぞ！」

どうやら、敵はさっきの銅鑼の音を攻撃の合図と勘違いしているらしい

といっても、いまさら違いますといっても聞き入れてはくれない
たった二百の部隊に全戦力を投入しているかのような勢いで出てくる敵、およそ五千

ちよっとやそつとじゃ止まらないだろう

「む……それは困るな」

一度綱吉に負けているせいか、『綱吉に馬鹿にされる』という所に敏感に反応した春蘭
実際、そんな事はないのだが。いわゆる『乙女の勘違い』という奴
だろっ

「くう……ま、まだか!？」

「もう少し……よし!いいぞ、姉者」

「応!総員、突撃いいいい!!!」

まるで、何かに弾かれたように飛び出す春蘭
そのスピードに兵がついていけなかったとか

後に、秋蘭が、春蘭の突撃の様子を

『まるで、光陰矢のごとくだったな』

と、語ったとか語らないとか

「順調ね・・・」

「はい。これだと暫くすれば戦闘も終わるかと」

華琳と桂花がいるのは全体を見渡せる小高い丘、其処から見えるは圧倒的有利と思われた賊が二千の華琳の部隊によって包囲されている姿

すでに突撃によって発生した混乱によって無秩序な集団と化していた意図的に開けられた逃げ道から逃げようものならすぐさま秋蘭の部隊によって残さず仕留められる
そして、すでに投降者も多数出ていた

「やはり、投降するものもいたわね」

「・・・ですが、大丈夫なのですか？後から暴れられては・・・」

「それは大丈夫だぞ」

桂花の言葉をさえぎったのはリボン

「ツナには超直感があるからな、変なことを考えている奴は即座に

見破られるぞ」

「というところらしいわよ？桂花」

「は、はあ・・・それにしても・・・あの男の雰囲気・・・戦闘前と全然違うわよね？」

「そうだな・・・それでも根本的な考え方はかわんねえ・・・優しいからな、ツナは」

リボーンが笑顔で話していると

『クフフ・・・マフィアのボスとしては致命的なことですがね』

どこからともなく声が聞こえてきた

「え・・・な、なに？」

「誰？・・・姿を見せなさい」

華琳の言葉で出てきたのは・・・

「クローム・・・？」

だが、雰囲気が違う・・・華琳はそう感じた

「・・・違うな・・・さつさと出てきやがれ、骸」

「そうせかさないでください・・・アルコバレーノ」

姿、声はクロームだが、口調が違っていた
そして、クロームが藍色の霧に包まれ・・・
再び現れたのは特徴的な髪形の少年

「な・・・お、男になった？」

「・・・リボン、これは・・・？」

「まだ話してなかったな・・・こいつがボンゴレ霧の守護者、六道ろくどう骸むくろだ」

「クフフ・・・初めまして」

物腰やわらかく一礼する骸を訝しげにみる二人

「守護者・・・ってクロームじゃないのかしら？」

「間違っちゃいねーが、クロームは骸に身体を貸してんだ」

「貸してるって……どういことよ!」

「そのままの意味ですよ……猫耳のお嬢さん

私は今、身体を使うことが出来ないのです、クロームの身体に憑依することでは存在することが出来ないのです」

「憑依……って」

「私がクローム無しで生きられないように……クロームも私無しでは生きられないのですよ」

「いろいろある様ね……で、その人が何の用かしら?」

「いえ……この戦闘を終結まで導いて差し上げようと思ひまして……」

骸はそう言つと、槍の柄尻を地面に突き立てる

ドゴオオオオン!!!!

あらゆる空間から火柱が噴き上がり、賊を飲み込んでいく

「うゝ、うわああ!……!」

「ぎゃあああ!……!」

「た、たすけ……！」

噴き上がる火柱は的確に賊のみの命を刈り取っていく

「もついい、止めるんだ骸」

「そうですね……では、これで終わらせましょう」

骸の右目が『六』に変わる

「骸！」

「さあ、踊り狂っていただきましょう！」

リボーンの静止も聞かず骸が手を振り下ろした刹那、賊同士で同士討ちを始めた

「な、なにが……起こっているの？」

「これこそが、六道骸の真の力『六道輪廻』だ」

「六道……輪廻？」

桂花がリボンを見て問いかける

「骸は前世で六道の全てを回ったといわれてるんだ
六道つてのは仏教において迷いあるものが輪廻するという、6種類
の迷いある世界のことなんだ

六道には

『天界道』

『人間道』

『修羅道』

『畜生道』

『餓鬼道』

『地獄道』

の六つがあるんだ、さっき骸が使ったのは六の道『天界道』だ
相手をマインドコントロールし意のままに操ることが出来るんだ」

「クフフ・・・今回はなにぶん人が多かったので、簡潔な指示しか
出してませんがね・・・

黄色い頭巾の賊を全員殺せ・・・とね」

「相変わらず・・・えげつねー奴だ」

「さて、私はそろそろ、退場させていただきまますよ
少々、長く出過ぎました・・・それに、彼も来ているみたいですよ
ね」

彼・・・この言葉に首を傾げる華琳と桂花

「骸!!!」

「おや・・・お早いお着きですね・・・沢田綱吉」

骸の元に飛んできたツナは着地するなり骸の胸倉を掴みあげた

「貴様！」

「おやおや・・・私は貴方の手伝いをしてあげたんですよ？
それに、クロームはどうか知りませんが
貴方は私にとつての標的であつて仲間ではありません
故に、貴方の言うことを一々聞く必要性もありません」

骸は心外だといわんばかりに胸倉を掴むツナの手を振り払う

「では、失礼しますよ
また会いましょう・・・沢田綱吉」

「待て！」

ツナが骸の手を掴む前にそれは藍色の霧に包まれ、クロームに戻り
ガクリと崩れる気を失ったクロームをツナは抱きとめる

「・・・・・・・・・・・・・・・・クッ！」

状況が把握できてない華琳は首を傾げ

「どづしたの？」

問いかける華琳をみて口を開こうとしたときリボンが話しかける

「確かにひでえな・・・投降してきた奴らまでやられてやがった」

「・・・・・・・・そう」

「・・・・・・・・クロームを・・・寝かせてくる」

ツナはクロームを抱きかかえ、天幕に戻った

「・・・・・・・・大丈夫かしら？」

「大丈夫だ、そんなやわな鍛え方はしてねえからな」

ニツと笑みを浮かべるリボンをみて
華琳は微笑んだ

かくして、骸の乱入もあったが、盗賊の討伐は完遂に終わった

第6弾 骸、来る！（後書き）

し、しんぶい・・・www

隠し弾1 蜀々桃園に降った嵐と雨 (前書き)

ここで他の守護者のお話を混ぜたいと思います

まずはじっちゃんとうまでし

隠し弾1 蜀へ桃園に降った嵐と雨へ

ツナたちが華琳と出逢った頃
ここ幽州五台山でも新たな出会いがあった

「二人ともへはやくへ」

「お待ちください、桃香様！
お一人で行かれては危険です」

「そうなのだ！こんな昼間っから流れ星なんて
なんだかすっごく怪しいのだ！」

「えへへへへへ。そうかなあ？」

この赤茶色の長髪の少女、『桃香』は首をかしげながら二人に話しかける

「鈴々の言う通りです。もしかしたら妖の類かもしれませんが、もう
少し慎重に行きましょう」

「ん、わかったよ、愛紗ちゃん、鈴々ちゃん」

桃香は黒髪の長髪の少女、『愛紗』と
赤髪の活発そうな少女、『鈴々』に足並みをそろえて歩く

「えっと……確かこの辺りだよな？」

「はい、私達が見た流れ星の軌跡は五台山の麓辺りで落ちたので……
この辺りで間違いないかと」

「じゃ、この辺りを探してみよっか」

三人は五台山で流れ星を探し始めた

「……ないねえ」

「ありませんね」

「ないのだあ……」

「でも、落ちたのはこの筈なんだけど……あ！」

三人が途方にくれていると……桃香が何かを見つけた

「二人とも、こっちに人が倒れてるよ！」

「本当ですか!?!」

「鈴々も行くのだ」

二人が駆け寄ると、そこに倒れていたのは……
白い服を身に纏った端正な顔立ちの高校生ぐらいの男が倒れていた

「……死んでる……のかな？」

愛紗が首筋に指を当てる

「……いえ、脈はあるようですので生きていますよ」

「よかったのだあ」

鈴々がホッとため息をつく
暫くして、男が目を覚ました

「んっ……」

「あ、気が付いたよ!」

「うっん……ここは……?」

「ここは幽州五台山ですよ」

「幽……州……?」

男は唸りながら首を傾げる。頭でも打つたのだろつかと心配する桃香
実際は知っているが思い出せないだけなんだが

「貴方の名前は?」

「俺?俺は北郷ほんじょう一刀いっとうっていうんだ」

「………かわった名前ですね」

「とりあえず、近くの村まで行くのだ!」

「そつだね、お医者さんがいたら診てもらったほうがいいです」

桃香のやわらかい笑みに思わず頷く一刀の腕を引っ張って走り出す
鈴々

「早く行くのだー!」

「待て、鈴々!北郷殿は起きたばかりなのだ、あまり激しく動かし
てはダメだ」

「うう……わかったのだ」

手を離して、歩き始める鈴々

そして、村に着くも、医者はいなかったので先に三人の用事を済ませることにした

「ん？酒瓶……なんて何に使った？」

「えへへ……内緒」

「ありがとうございます……べつやら、この先の丘のところにあるそうです」

「よし、じゃ、しゅっぱーっ」

走り出す鈴々をみながら三人は後を付いていくように歩き出す

「……女将の話だとこの辺りだそうです……」

「きつと、この丘の向こう側にあるんじゃないかな？」

「よし、言ってみようか」

一刀達は一步步、踏みしめるように丘に登る
そして丘を越えると、あたり一面に桃色の光景が広がる

「おお……これは凄い」

「すごい……これが桃園かあ」

「美しい……正に桃園という名にふさわしい美しさです」

「さあ！酒だあ〜！」

待ちきれないのか、鈴々が一刀の周りを駆け回る

「まったく、鈴々は花より団子だな」

「あははっ、鈴々ちゃんらしいねえ」

「なのだー」

楽しそうな三人を見ていると、なにやらこっちに流れ星が落ちてくる

「おいおい・・・やばいんじゃないのか!？」

「みんな逃げるのだー!」

俺達はその場から退避する

落ちてきた流れ星は地面に直撃する寸前で止まり、ゆっくりと着地した

四人が恐る恐る近寄ると・・・

そこには銀髪の少年と黒髪短髪の少年がいた

「こ、これって・・・もしかして・・・」

「間違い・・・ありません」

「天の御遣い様なのだー!!!!」

「・・・天の御遣い?」

「はい。この国に近くこんな噂が流れているのです

『天より流星とともに現れたる御遣い、その炎の力を持って、戦乱を収め安寧をもたらす』

・・・と」

「たしか・・・何とかっていう占い師の予言だったよね?」

「『^{かんろ}管輅』です、桃香様。ただ、管輅はエセ占い師と呼ばれていた
ので、真実かどうかは定かではありませんでしたが……」

「当たったのだ！御遣い様が降ってきたのだ！」

一刀達が話していると、二人の少年、獄寺と山本は目を覚ました

「ん………ここは……？」

「なんか、並中じゃねーみてーだな」

「あ、あの……」

桃香が話しかけると、獄寺は訝しげににらみ

「なんだ？テメーは」

いつもの通り、話しかけてきた桃香にガンをたれていた
そして桃香は……予想通りにビビってしまった

「獄寺！……ワリーな、こいつも悪気があってやったわけじゃね
ーんだ」

「そ、そうですね・・・あ、あの・・・御遣い様！」

桃香の御遣い様という単語に首を傾げる二人

「・・・なんなんだ？いきなり出てきて御遣い様とか、意味わかんねーんだけど？」

「この国の占い師がこう述べたのです

『天より流星とともに現れたる御遣い、その炎の力を持って、戦乱を収め安寧をもたらす』

「・・・と」

「あなたたちは、流星、つまり流れ星と共にやってきた御遣い様なのです！」

「なん・・・だと？」

「なんか、すげーことになってんな！」

「お前はもう少し驚くなりなんなりしやがれ！」

「これでも驚いてんだぜ？・・・あ、そうそう、良かったらあなたの名前、おしえてくんねーか？」

山本は人差し指で一刀達を指差す

「それもそうだな・・・俺は北郷一刀、聖フランチェスカ学園の学生だ」

「ってことは・・・」

「俺達と同じでこの時代の人間じゃないのか!？」

「ま、まあ・・・そうなるかな？」

「北郷殿も御遣い様とは・・・!」

「おどろきなのだ!」

「じゃ、次は私ね!私は劉備。姓は劉で名は備で字は玄德、真名は桃香だよ!」

「・・・は?」

「えっと、劉備ってだれだっけ?」

山本のその台詞に呆れてしまう獄寺

「馬鹿か!劉備ってのはな三国志に出てくる蜀漢の初代皇帝だ!」

「へえ、そうなのか」

「では、次は私だな。私は関羽。姓は関、名は羽、字は雲長、真名は愛紗です」

「そつちは関羽か・・・『せいりゅうづえんげつとつ青龍偃月刀』を振るい、数多の武将を屠つてきた一騎当千の武将だな」

「それも、天の知識なのですか？」

「ん？まあな」

「次は鈴々なのだ！鈴々の名は張飛、姓が張で名が飛、字は翼徳、真名は鈴々なのだ！」

「・・・ありえねえ、こんなのが張飛って事がな」

ガクリとうなだれる獄寺

「まーまー、いいじゃねーかよ」

「次はお兄ちゃんたちの番なのだ！」

はあ・・・とため息をつき、顔を上げる獄寺

「・・・獄寺隼人・・・ボンゴレファミリー嵐の守護者だ」

「俺は、山本武。同じくボンゴレファミリーの雨の守護者だ、よろしくな！」

二人は自己紹介を終えるも、四人は今いちわからないといった表情だ

「ほんごれふぁみりー……ってなんなのだ？」

「……マフィアって中国ではなんていうんだ？獄寺」

「……わかんねえ」

首を傾げてしまう山本と獄寺

「何かの組織ですか？」

「まあ、そんなとこだな。な？獄寺」

「……ああ、そうだな。うちの十代目は最高のボスなんだぜ
！」

「ぼす？それってえらいのか？」

「ああ！」

それから30分、獄寺はツナのいいところを語り続けた……

「まあ……そのボスさんのことはわかったので……」

「そろそろ、決めていただかなければ」

「ん？何をだ？」

「鈴々たちのご主人様になってほしいのだから！」

「「な、なに!?!」」

「ダメ……ですか？」

「えっとな……俺はそういうのはちょっと……なあ？獄寺」

「あ、ああ……そうだ！こいつなんかどうだ？」

獄寺はずいっと一刀を押し出す

「私は構わないですよ」

「そうでんすね、私も構いませんよ」

「鈴々もさんせーなのだー！」

「ええ……!?!？」

「頑張れよ、ご主人様」

「あはは、ま、頑張れ」

一刀の肩を叩く山本

「では・・・桃香様」

袋から杯を取り出す愛紗

「・・・ん？おかしいな・・・六つも入っている・・・」

「いいじゃんいいじゃん、2人の御遣い様も参加してもらおうよ」

「それがいいのだー！」

「ほら、君達も」

「あ、ああ・・・」

「それじゃ、遠慮なく」

山本と獄寺も杯を持ち、皆がするよつに上上げる

「我ら六人、姓は違えども姉妹の契りを結びしからは」

「心を同じくして助け合い、困まっている人たちを助けるのだ！」

「同年、同月、同日に生まれることを得ずとも」

「願わくば同年、同月、同日に死せん事を」

「」「乾杯！」「」

こうして、獄寺と山本はかの有名な桃園の誓いを劉備たちと結んだのである

隠し弾1 蜀々桃園に降った嵐と雨 (後書き)

次回は、呉にいきます

隠し弾2 幽州の太守・公孫贇

「で、これからどうすんだ？」

「とりあえず、幽州の太守に会いにいこうと思います」

「幽州の太守の公孫贇・・・伯珪ちゃんは同じ先生のところで学問を学んだ仲なんですよ」

「へえ、じゃ、友達だな！」

「はい！」

「鈴々も武お兄ちゃんのもだちなのだー！」

「ははっ、そうだな！」

山本が桃香たちと話してる後ろでは獄寺と一刀が話をしていた

「つーことは・・・お前は炎を出せる力はねーんだな？」

「ああ・・・っていうか、お前達が御遣いなんだから桃香たちの主人様になればいいのに」

「・・・柄じゃねーんだよ・・・そついつの」

「ふうん・・・」

「ご主人様ー、着きましたよ」

小高い丘から見える街

ここが公孫贄の治める街・・・らしい

「さ、行きましょう、ご主人様」

「一刀お兄ちゃんも行くのだ！」

愛紗が獄寺の手を、鈴々が一刀の手を引いて歩き出す

「おい！何で俺がご主人様なんだよ！？」

「あなたがたが、天の御遣いなれば・・・当然の事と思えますか？」

「ったく・・・めんどくせーやつ」

こうして、一向は公孫贄の治める街に入った

「桃香！久しぶりだな！」

「白蓮ちゃん！元気だった？」

「ああ」

劉備一行は街の一角にある幽州の太守、公孫贇の屋敷にいた

「初めまして公孫贇殿、関雲長と申します」

「鈴々は張翼徳なのだ！」

「へえ、あの関羽と張飛か！私が公孫贇だ、よろしくな！」

「それで、白蓮ちゃん、頼みたい事があるんだけど……」

このとき、初めて公孫贇を見た獄寺の印象は

『なんか影が薄そう』

だったとか

本人が聞いたなら泣いてしまつてあろう
それはさておき

桃香は公孫賛に義勇兵を募り、近く決起することを話した

「なるほど、それまでの間ここに居させて欲しいってことか」

「うん！」

「いいぞ、好きなだけここにいといるといいよ」

「ありがとう！白蓮ちゃん！」

「ああ！・・・ところで、そこの男3人は誰だ？」

「実はこのかたがたは、『天の御遣い様』なのです」

「な、何い！？あ、あのエセ占い師が言つたつていう予言の！？」

訝しげに獄寺たちを見る公孫賛

まあ、普通であれば疑うのも無理はない

「そう！私達は空から降つてくるのを見たんだよ！」

「そ、そうなのか・・・まあ、一応名前だけでも聞いておくか」

「さ、ご主人様・・・自己紹介を」

「お、おう・・・俺は北郷一刀・・・一応『天の御遣い』やってます」

「・・・獄寺隼人・・・よろしく頼む」

「山本武だ！よろしくな」

「私は公孫贇、字は白珪だ、よろしくな御遣い様」

「おや、どなたかお客人かな？」

後ろを振り向くと、青い髪の女性が立っていた

「ああ・・・彼女らは劉備とその仲間で、男三人は天の御遣い様ぞうだ」

「ほう！あの噂の・・・でもおかしいですね？噂では魏や呉でも御遣いが現れたとか現れないとか・・・」

「なんだって!？」

「しかも魏の御遣いは炎を身に纏い賊の討伐に一役買ったとか」

「おい！その御遣いの名前とかわかんねえのか!？」

「い、いや・・・そこまではわからなかったのだ」

「そ、そうか・・・すまねーな・・・」

「うむ・・・そういえば自己紹介がまだであったな。私の名は趙雲。字は子龍だ。よろしく頼みますぞ」

「はい！よろしくお願ひしますね、趙雲さん！」

「ところで、ご主人様は魏の御遣い様に心辺りでも？」

「ああ、ちよつとな・・・」

桃香達は暫くの間、公孫賛のところまで義勇兵を募るため行動を開始した

隠し弾2 幽州の太守・公孫賛（後書き）

終わり方が微妙に変だw

隠し弾³ 小霸王の気分は曇のち晴・・・ついでに雷？(前書き)

呉は雲雀、了平、ランボです

隠し弾3 小霸王の気分は雲のち晴・・・ついでに雷？

「あゝ・・・暇・・・ねえ・・・」

ここは、袁家配下の地、建業

そしてこの声は建業を治める『小霸王』と呼ばれる女傑・孫策。字は伯符、真名は雪蓮

毎日ここで酒を飲んで暇をもてあましている

「なーんか・・・面白い事ないかしら？」

「ほう？ならば今すぐ用意してやるわ」

この女性は呉の名軍師・周瑜。字は公瑾、真名は冥琳
毎日孫策の暇発言に頭を悩ませている

「っても・・・どうせ政務でしょう？」

「当たり前だ・・・いったい何日やってないとおもっているんだ？」

「一週間」

「一ヶ月だ！」

怒鳴りつける周瑜の言葉を指で耳栓をして聞き流す孫策
その時、流星が流れた

「あ、みてみて！流れ星！きっと天の御遣いよ」

「まさか・・・あんな予言を信じるのか？」

「んふふ・・・私の『勘』が告げているのよ！」

そう言い放てば流星を見上げる・・・・・・・・・・
その流星はなんと中庭に落ちた

「いくわよ！冥琳！」

「ま、待つんだ！雪蓮！」

「あ、雪蓮様！冥琳様！」

この少女は周泰。字は幼平、真名は明命
非常に真面目な性格で大の猫好き

「流れ星は!?!」

「この先です」

この女性は陸遜。字は伯言、真名は隠^{のん}
冥琳の愛弟子で副軍師。読書で新たな知識を会得すると性的に興奮
するちよつと変わった女性

「ほら、あれです」

土煙をもくもくと上がらせていた場所を指差す隠

「・・・見えないわねえ」

雪蓮が近づくと、奇妙な歌声が聞こえた

『ミードリータナービクーナミモリノーダイナクシヨウナクーナ
ーミガイイー・・・』

出てきたのは奇妙な歌を歌う・・・小さな鳥『ヒバード』

「・・・な、何の歌？」

「さ、さあ・・・」

そして、砂煙から人が現れる

「・・・」

「うーむ、極限にわからんぞ！」

「ランボさん、あめが食べたーい」

出てきたのは奇妙な格好の少年二人と小さな子供が一人
了平と雲雀、そしてランボ

「あ、あれが・・・天の御遣い？」

「・・・なのだろうな」

子連れれの御遣いなど聞いたことがない四人はしばし呆然とした

「ん？あそこに人がいるではないか！おー・・・」

「ねえ、君達・・・なに群れてるの？」

了平が声を掛ける前に、雲雀が四人に話しかけた

「群れてる・・・って？」

「どづいつことでしょうか？」

「わ、わかりません・・・」

雲雀の言っている意味がわからずに首を傾げる

「群れてるなら・・・咬み殺す」

どこからともなくトンファーを取り出し雪蓮に襲い掛かる雲雀だが、それを阻止するのは明命

「何をするんですか!？」

「邪魔をするなら・・・君から咬み殺す!」

「……して、雲雀達と小霸王のめぐり合いは最悪の形で幕を開けた

隠し弾3 小霸王の気分は曇のち晴・・・ついでに雷？(後書き)

良かったら感想プリーズw

隠し弾4 戦闘狂とかいて〜ひびり〜と読む

「貴様！この方を孫策伯符と知つての狼藉か！？」

「関係ないよ」

冥琳が声を上げて咎めるも雲雀は知らん顔
視線を再び明命に戻し

「さあ、かかつてきなよ」

トンファーを構えなおす雲雀
そして長刀『魂切』を構える明命
両者が飛び出し、まさに激突する瞬間、大きな声がそれを止める

「やめんかあ！馬鹿者！」

その声は笹川了平
そのよく通る声はどこまでも響きそうな声で
その声を聞いた明命と雲雀はいったん動きを止めそちらを向く

「……なにかな？邪魔をするなら君も咬み殺すよ？」

「初対面の人間に向かってなにをやっているか！
まずは状況確認が最優先だ！」

その言葉に目を見開く雲雀

これまで結構考えなしに行動していた了平をみていた雲雀は驚いて
しまったのだ
了平も成長しているということだ

「……興味がなくなったよ……早くしてよね」

戦意を無くしたのか、雲雀はそのままその場を立ち去る
その後、ここでは話しづらিদらうということとで玉座の間に通され
た三人

「さっきは本当にすまなかつたな！」

「気にしてないからいいわよ」

「で、お前達は何者だ？見た感じではこの街の住人ではないようだ
が」

「俺か？俺は並中ボクシング部主将3年、笹川了平だ！」

そしてこの学生服を着ているのが、雲雀恭也、並中風紀委員長だ！」

「そして、俺様がランボさんだもんね！」

「変わった名前ねえ」

「では次はお前達の番だな！」

「そうね。私は孫策。字は伯符で、真名は雪蓮よ」

「孫策う！？……………どっかで聞いたことがあるな」

「……………三国志に出てくる『小霸王』……………ふうん」

「三国志……………？難しい話はよくわからん……………」

首を傾げる了平をみた雪蓮は苦笑し

「自己紹介、続けていいかしら？」

「お？おお、すまん！続けてくれ」

「私は周瑜。字は公瑾、真名は冥琳だ」

「わ、私は周泰です。字は幼平、真名は明命です」

「私は陸遜と申します。字は伯言、真名は隠です」

と、四人が自己紹介を終えたところでした。平が手を上げた

「すまんが、真名とはなんだ？」

「真名って言うのは、その人が持つ本当の名前よ。本人が心を許した証として与える名前だったりするの。勝手に呼んだりしたら・・・殺されるわよ？」

「そうなのか・・・うむ、気をつけよう！」

「りょーへー、ランボさんおなかすいたー」

「おお、ならばどこかで飯を・・・」

「孫策様！」

ポロポロの兵士が転がり込んできた

「ちよつと、今大事な話中なんだけど？」

「も、申し訳ございません！ですが、孫権様からの火急の伝言が・・・」

「蓮華から!？」

「はっ！賊の数が予想より遙かに多く・・・至急増援をと・・・」

「わかったわ！明命と私で行く」

雪蓮が玉座の間から出ようとしたとき、了平が口を開いた

「よし、俺達も行こう」

「なに勝手に決めてるの？」

「お前も暴れ足りないだろう？」

「……早くしてよね」

「危険だわ、貴方達はここにいなさい！」

「そう言うな、味方は多いほうがいい、それに自分の身は自分で守る」

「……勝手にしなさい」

「よし、いくぞ雲雀！」

「……しょうがないな」

「ランボさんも行くもんね」

こうして、了平、雲雀、ランボによる、伝説に残る討伐劇が始まる

た

隠し弾4 戦闘狂とかいて〜ひびく〜と読む(後書き)

なんか、多分雲雀さんが丸くなる予感・・・

隠し弾5 掛ける雷、照らす日輪、増える雲（前書き）

雲雀の登場シーンはアニメで流れる雲雀の登場曲を脳内で流してくだ
さい（え）

隠し弾5 掛ける雷、照らす日輪、増える雲

「くっ……陣形を崩すな！持ちこたえて！」

「む、無理です！持ちこたえられません！」

「ええい！気合をいれんか！」

「くっ……数が多すぎる……！」

「あーっ、もう！いいかげんにしなさいよね！もう！」

戦場では、孫権、呂蒙、黄蓋、甘寧、孫尚香が戦鬪を繰り広げていた
だが、戦況は非常に悪く、賊に囲まれている

158

「くっ！もう少ししたら増援が来る！それまで持ちこたえて！」

「くくくはっ！」「くくくはっ！」

雪蓮達は間に合うのか？

「もうすぐです!」

雪蓮一行は馬を駆って戦場に向かっていった

「まだ着かんのか!？」

「も、もう少しです!」

小高い丘の頂上に着いたとき、戦場が見えた

「まだ持ちこたえてるわね!急ぐわよ!」

「はっ!」「はっ!」

再び馬は駆け出す

馬に乗った兵士が振り向く

「あれ?あの方々は・・・?」

後ろに乗っていた了平達は姿を消していた

「きゃああつ！」

「「蓮華様っ！！！！」」

孫権が腕に矢を受けてしまい倒れる
それを取り囲んで自らの身体を盾にする四人

「あなたたち、何を!？」

「生きてください・・・蓮華様」

「思春!?止めなさい!思春!!」

賊の剣が思春・・・甘寧に向かう

「いやああつ!!!!」

蓮華は目を瞑り叫んだ・・・
だが、次に聞こえてきた音は・・・

「ぐわっ!?!」

止めを刺そうとした男の声

「な、何が・・・?」

「君、うるさいよ」

「な!?!何だ貴様は!?!」

蓮華の問いにうるさいと言った雲雀に噛み付く思春
他の三人も微妙に訝しげに雲雀を見る

マキシмум・キャノン
「極限太陽!?!」

了平の声と共に拳から繰り出される炎の圧縮エネルギーが敵を吹き
飛ばす!

「もうーばあああつ!?!?!?!」

もう一度マキシмумキャノンを放ち、蓮華達への道を作る

「ランボさんもやるもんね！牛どくん！」

ランボのアニマルリングが光り、雷牛Ver・V（ブーフアロ・フ
ールミネ バージョン・ボンゴレ）が出現
牛井に乗って賊を吹き飛ばしながら走らせる

「大丈夫か！？」

「お、お前達は・・・？」

「今はそんな事を言っている場合ではない！軽い応急処置だが治療
するぞ」

了平は晴ゴテを取り出し炎を灯し、傷口に近づける

「え！？・・・ちょ、ちよつと！？」

「貴様！蓮華様に何をする！？」

「大丈夫だ、熱くは無い・・・少し痒くなるがな」

傷口に晴ゴテを押し当てる

すると傷口が見る見るうちに塞がっていく

「ほ……本当だ……」

「な、なんと……」

「すごーい！」

「あまり大きな傷は無いようだが、あまり動くなよ」

了平はその場で立ち上がる

「来い！ カンガリユウ 漢我流！」

その声に呼応するかのよう^ににアニマルリングが光る。そして、晴カ
ンガルVer.V（カンゲーロ・デル・セレーノ バージョン・
ボンゴレ）を呼び出す
因みに名前は漢我流 カンガリユウ
そして、空に飛び上がる了平

「ちよっ……と、飛んだ!？」

「何と……奇怪な」

「行くぞ！漢我流！ブレイクだ！」

漢我流の背中の一門のキャノン砲から晴の死ぬ気の炎を発射させ、その身に受ける

「ぐうう……行くぞ！カンビオ・フォルマ形態変化！」

「グウオオオオ！！！」

漢我流が飛び上がり了平と重なる

そして漢我流が光になり、額当てとグローブに変化する

「これが俺の、『マキシマムブレイク』だ！」

そう言うなり、賊のど真ん中に飛び込み敵を倒していく

「いっけー！ぎゅうーどーん！」

「君達は、咬み殺す」

「おらおらー！俺に勝てる奴はおらんのかー！」

三人だけだが、次々と賊を薙ぎ倒していく

「な、なんて強さ……!!」

「ふうむ……これは、もしかすると、あの『飛將軍』と同等か……あるいは……」

「蓮華ー!」

そこに雪蓮と明命がやってきた

「姉様!」

「大丈夫?蓮華」

「はい……なんとか」

「それにしても……凄いわね」

雪蓮がみた光景は、全ての賊が三人の御遣いによって全滅させられた光景

「姉様……あの者どもは……?」

「……天の御遣いよ」

「あ、あれが……?」

「天の御遣い……」

七人の武将が見守る中、その三人はこちらに戻ってきた

「お、来たな孫策！遅かったんで全滅させてしまったぞ！」

「まったく……遅いよ」

「ランボさん、楽しかったもんね」

「ふふふ……あはははっ！」

その光景にあっけにとられた雪蓮は突如笑い出した

「ははっ……面白い子達ね！……いいわ、私達の真名呼んでもいいわよ」

「何？……いいのか？大事なものではないのか？」

「あなたたちならいいわ……皆もいいわね？」

その言葉に、ほぼ全員が頷いた……が

「私は反対です！こんな得体の知れないものに真名など！」

反対したのは蓮華と思春

「僕も必要ないよ」

そう言って、どこかに歩き出す雲雀

「待て、どこに行く気じゃ？」

「帰る……君たちの住処は覚えてるからね」

「……明命、一応付いて行ってやれ」

「はいー」

そう言って明命が雲雀の後をついていく

「……まあ、蓮華と思春の真名についてはいったん保留にするわで……これからどうするの？」了平

「しむ、適当に出歩いてもいいことはないからな！暫くはここで世話になる事にしてよ」

「そじゃ、これからよろしくね、了平」

「おじー！」

「それからランボもね」

「わかったもんね！」

こうして、了平、ランボ、雲雀が呉入りした

第7弾 義勇軍、来る！（前書き）

やっと本編に戻りましたよw

第7弾 義勇軍、来る！

呉や蜀に獄寺達が現れてから暫く後

盗賊討伐から数日後の陳留ではツナが懸命に仕事をしていた

盗賊討伐の功績として曹操・・・華琳は刺史から州牧に昇進していた

そしてツナは、黄巾党の動きが活発になったため、討伐にほぼ毎日
駆られている

さらには、文官の仕事まで任されたのでさあ大変

必死に覚えた漢文を駆使し、何とか消化していくものの翌日にはま
た、増えている

その黒幕は、猫耳軍師なのだが・・・

「はぁ・・・も、もうだめ・・・」

「ボス・・・大丈夫・・・？」

「う、うん・・・なんとか」

ここは城内部の食堂

丁度、お昼時も重なって賑わっている

ツナはクロームと一緒にテーブルのある椅子に腰掛けていた

「ツナくん」

「ツーナさん」

そこにやってきたのは女官として働いている京子とハル
最近の仕事にも慣れ、仕事仲間や兵士の人とも仲良くやっているそ
うだ

「お仕事お疲れ様です！ツナさん！」

「はい！これ、お弁当だよ、クロームちゃんのもありますからね」

「あ、ありがとう！京子ちゃん」

（京子ちゃんのお弁当が食べられるなんて・・・最高！）

ツナは疲れを忘れて喜んだ

「あ・・・ありがと・・・京子・・・ハル」

「あ！名前、呼んでくれたね！クロームちゃん」

「ハルも聞きました！コングラッチュレーションなのです！」

そんな三人のやり取りを見ながら微笑ましくお弁当を食べるツナ

「ツナ君、最近どう？戦いのほうは」

「う、うん・・・黄巾党も動きが活発になってきて・・・討伐に明け暮れてるよ」

「ベリーでんじゃらすです！」

「うん・・・でもたまに『天和ちゃんばんざーい！！』とか言う人がいたんだけど・・・」

「私も聞いた・・・私は『人和』だったけど・・・」

そんな話をしていると、誰かが話しかけてきた
その人物は・・・

「ちょっと！何やってんのよ！？もうすぐ軍議の時間なのよ！？」

桂花だった

「え！？、ご、ごめん！」

「ツナ君、ごめんね？」

「ハルも気が付かなかったです・・・ソーリーですツナさん」

「いいよ、京子ちゃんやハルは悪くないから・・・クローム、行く」

「うん、ボス」

ツナは京子達と別れて、急いで軍議の行われる部屋に向かった

「ごめん！おく・・・」

「おせーぞ！ダメツナ！」

バキッ！

「ぎゃあっ！」

軍議が始まって少ししてから来たツナに
リボンが容赦ない制裁（飛び蹴り）を喰らわせた
ツナは思いつき後ろに吹っ飛んだ

「な、何すんだよ！リボーン！」

「うるせえ。なかなかこねーからサボってんのかと思ったぞ」

「んなわけないだろー!？」

「もういいから、早く着席しなさい」

華琳に促されてツナとリボーンは席に着く

「では・・・続きを」

「はっ」

華琳に促され、桂花が説明を再開する

現在、黄巾党と思われる賊が村を襲っている

すでに二つの村が襲われており、賊はすでに次の村に侵攻中

賊の規模は約七千、前の戦闘より厄介だ・・・とはいえ逃げるわけには行かない

次の村が狙われているのだから

「綱吉」

「な、なに？」

「……単騎先行はダメよ」

ギクッ

「そ、そんなこと……するわけないじゃん！あ、あはは……」

「まったく……これから貴方は『將軍』という立場の人間になるのよ？もう少し自覚を持ちなさい」

「う、うん……って……えええええ！？しよ、將軍！？」

「うるせーぞ！バカツナ、ちったー静かにしやがれ！」

「で、でもリボン……俺に將軍なんて……」

「そ、そうです！華琳様！こんな男に何も將軍など……！」

「あら？桂花は私の決めた事に異議があるのかしら？」

笑ってはいるが、その視線は笑みをたたえてはいない

「はっ……い、いえ……」

「大丈夫よ、知識なら詰め込めばいいし、武においては春蘭と互角・
・申し分ないわ」

「た、確かに・・・猪で無い分多少は使えるかも・・・」

「な、何だと!？」

「姉者・・・今暴れても仕方ないだろう」

「む・・・」

「情報によれば、近くに義勇軍がいるらしいわ」

この間まで公孫贄の所にいたらしいけど、近く兵を挙げて黄巾党を潰して回っているらしいわ」

そして、ツナは次の言葉に驚く事となる

「どうやら、義勇軍にもいるらしいわ・・・『炎を纏う天の御遣い』がね・・・」

「な、なんだって!？」

「しかも、その御遣いは四刀を振るう剣士と何者をも打ち貫く弓使いだそうよ」

ツナは驚きを隠せずにそのまま椅子に腰掛ける

「ボス・・・多分、雨と嵐の人・・・」

「そうだね・・・」

「もしかして、お仲間なのかしら？」

「そつだぞ！嵐の守護者と雨の守護者だ」

「そう・・・呉でも似たような噂を聞くし・・・ふふ・・・面白くなりそうね」

華琳がほくそえむなか、一人の兵士がやってきた

「曹操様！出撃の準備、整いました」

「うむ、では春蘭たちの準備が出来次第、すぐに出立する！」

「」「はっ」「」

「なあ、リポーン」

「なんだ？」

「・・・もしかして、守護者同士で戦うなんてないよね？」

「わかんねえな・・・なんせ雲雀がいるからな・・・どこにいるかはしらねーが

出てくるとなると、確実に武将やツナたちを狙ってくるだろう」

「・・・」

「ま、そんなときゃボスの底力を見せてやればいいだけのこった」

「うん・・・そうだね」

「今回はツナにも小隊が付く事になってんぞ」

「あ、そっか・・・將軍だもんなあ」

今回、將軍になったツナに千騎、騎兵が与えられている

「部隊名は・・・無難に沢田隊でいいだろ」

「うん、じゃ・・・行って来る」

「おっー」

ツナは頷き、馬にまたがり出立した

「……間に……合わなかったわね」

件の村に着いたが、すでに襲撃された後だった
村は焼き払われ、戦った農民の死体が広がっている

「くっ……なんで……こんな事が出来るんだよ」

「ちょっと、アンタ顔色悪いわよ!？」

たまたま横に来た桂花に指摘されたツナは苦笑いし

「だ、大丈夫……無理は……しないから」

「フン……ぶっ倒れるとかしないでよね!運ぶのが大変なんだか
ら」

いつものようにツンツンしながら先に行く桂花をみて、少し楽にな
ったツナだった

「生存者は？」

「はっ！残念ですが・・・居ませんでした」

「そう・・・」

「ただ、男と子供の遺体はあるのですが、女の死体が以上に少なく・・・」

「そ、それってどういう・・・？」

ツナの問いかけに華琳が答える

「そのままの意味よ。村を焼き払い、金を奪い、男子供は殺し、女は攫い慰み者にされる・・・これが今のこの国の実情よ」

「そ、そんな・・・」

「・・・綱吉、貴方は村の外で少し休んできなさい」

「う・・・う、うん」

弱く頷きながらツナは村の外に向かう

「……まったく……世話を焼かせるわね」

「仕方ありませんよ……私達は慣れていますが……綱吉は……」

「わかっているわ……秋蘭……付いてあげて」

「はっ」

身を翻し、その場を後にする秋蘭

「綱吉……貴方には……笑顔が一番似合うのよ」

その咳きは、誰に聞こえることなく空に消えていった

「はぁ……やっぱり、なれないや」

村の入り口付近の岩に腰掛けるツナ
近くではそれぞれの部隊の兵が待機していた

「邪魔、してもいいかな？」

そこに現れたのは秋蘭

「あ、ど、どうぞ」

岩の端つここに移動すれば空いた所に秋蘭が腰掛ける

「慣れないか？死体は」

「・・・はい」

「そうだろうな」

沈黙・・・

ツナは何を話したらいいのかわからなかった

「綱吉は人が死ぬのを・・・傷つくのを極端に嫌っているな？」

「そう・・・かもしれない・・・です」

「まあ、それも道の一つかもしれない・・・

綱吉は・・・どうしたいんだ？」

「俺は……罪のない人々を守ってこの戦乱を終わらせたい」

「また……随分と無茶な事を言うんだな、綱吉は」

「やっぱ……ダメ？」

苦笑いしながら首を傾げるツナを見て秋蘭は笑みを浮かべる

「いいんじゃないか？誰も止める奴は似ないと思うぞ」

「そっか」

少し笑顔を浮かべて頷くツナ

「ふ……やつと笑顔を取り戻したな？」

「え？」

「何でもない」

はぐらかす様に笑みを浮かべる秋蘭を見て、ツナは首をかしげた

「夏候淵様！沢田様！後方から義勇軍と思われる集団が！」

「秋蘭」

「わかっている。すぐに華琳様に報告を、他のものは部隊に手を出すなど言っておけ」

「「「はっ!」「」」

ツナは義勇軍を見ながら感慨深い思いにふけていた
嵐と雨の守護者に逢えることに

「おい、なんか見えんぞ?」

「お、ホントだ」

「あれは・・・官軍ですが・・・牙門旗は『曹』と書かれています」

「という事は・・・曹操さんだね!」

「霸王・曹操か」

「はは、どんなやつなんだろーな」

「ここまで、有名な奴が全部女だからな・・・」

「ま、なんとなくわかるか」

近くで行軍を止め、馬を下りると、獄寺にとっては聞き間違えるはずのない懐かしい声が聞こえた

「獄寺君！山本！」

「じゅ・・・十代目!？」

「お！ツナじゃん!？」

走ってくるツナに駆け寄る二人。暫くぶりの邂逅だった

「二人とも、元気だった？」

「はい！十代目こそお元気そうぞ何よりです！」

「はは 相変わらずだな、獄寺は」

「あ・・・嵐の人に雨の人・・・」

「お前も無事だったか、クローム」

「・・・うん・・・あと、京子とハルも」

「笹川とハルも来てんのか？」

「つか、いつから名前と呼んでんだ？」

こんな守護者とボスの再会に、何事かと集まってくる武将達

「あら、どうしたの？綱吉」

「なっ！？てんめー！十代目に向かってなんて口を利きやがるんだ
！」

「貴様こそ、華琳様に向かって無礼な！」

互いににらみ合う獄寺と春蘭を山本と秋蘭が抑える

「落ち着けて！獄寺」

「姉者も落ち着け・・・話が進まん」

「・・・・・・・・で？この躰のなっていないのはあなたの仲間かしら？綱
吉」

「え？あ、ああ・・・うん、獄寺君って言って、ホントはもっと優
しいんだよ」

「で、俺が山本武つてんだ、よろしくな！曹操さん」

すっと、手を出し華琳に握手を求める山本

「握手はいいわ・・・それより、何で私が曹操とわかったのかしら？」

華琳はその手をやんわりと拒絶し、気になった事を問いかけた

「そつか 何でわかつたかかって言うと、その黒の長髪の人があんたの事を様付けで呼んでたからさ
その黒髪の人も一般兵にしては、毛色が違うし・・・何より強そうだったんで

そんな人が様付けで呼ぶつて事は・・・一人しかいねーだろ？」

「・・・へえ、たいした物ね」

「おう」

「おい、そろそろこいつらのこと話さなくていいのか？野球バカ」

「そうだな！桃香、皆を連れてきてくんねーかな？」

「はい、ご主人様」

「ええ！？ご、ご主人様！？獄寺君、何やってんの！？」

「ち、違います！十代目、これには深い理由が！」

獄寺はご主人様と呼ばれている経緯を話した

「なんだ・・・『天の御遣い』だからか・・・びっくりしたよ・・・」

「申し訳ありません！十代目」

「みんな連れてきたよ」

皆が桃香のほうを向くと
あきらかにロリが三人ほどいた

「獄寺君・・・これって？」

「驚くなかれですよ、十代目
まずは、こいつらを呼んできてもらったのはこの義勇軍のトップ、
劉備です」

「はい、ご紹介にあずかりました、劉備です。字は玄德です」

「んで、この黒髪の女が『黒髪の盗賊狩り』の関羽」

「関羽と申します。字は雲長。よろしくお見知りおきを」

「それで、この赤い髪のちびっ子が張飛」

「ちびっ子じゃないのだ！鈴々は張飛、字は翼徳。よろしくなのだ」

「最後に軍師コンビ、『はわわ軍師』と、『あわわ軍師』の諸葛亮と鳳統」

「はわわ……しよ、諸葛亮といいます、字は孔明。よ……よろしくでしゅっ！……あ」

「うう……ほ、鳳統といいます……字は士元……よ、よろしく……です／＼」

一通りの自己紹介を終え、ツナは獄寺に話しかけた

「……なんか、全員、女の子何だけど？」

「お、俺もわかりませんよ……」

「ま、いんじゃね？」

山本の言葉に苦笑するツナに華琳が声を掛ける

「じゃ今度はこちらの自己紹介ね、綱吉」

「……俺がするの？」

「当たり前じゃないの」

「……しょうがないな

じゃ、こっちの紹介もするね

まずは、皆さんも知っての通り、この間州牧に昇進した曹操。字は孟徳」

「よろしく」

「で、この黒髪の美女が夏侯惇。字は元讓」

「びっ……美人！？……んんっ！……よ、よろしく頼む／＼」

「そして、青い髪の人が夏侯淵。字は妙才」

「むっ……んんっ、よろしく」

微妙に不機嫌な秋蘭をみて少しびびるツナ

「で、この……猫耳軍師が荀？。字は文若」

「……覚えときなさいよ綱吉……ん、よろしく」

「この桃色の髪の子が許？。字は仲康」

「はい、よろしくね！」

「で、眼帯つけてる子がクローム。字はないからクロームって呼んであげて」

「……よろしく……」

「最後に、俺は沢田綱吉。字はないから、沢田か綱吉で呼んで」

「紹介は……これでいいかしら？」

「はい」

「今、斥候を出して賊を探させてるから、見つかるまでは自由時間にしましょう」

「了解です」

自己紹介(?)を終えた両軍は、一時の自由時間に身体を休めるのであった

第7弾 義勇軍、来る！（後書き）

あゝ・・・文章が微妙だ・・・

第8弾 VS黄巾党、来る！

「それにしても、十代目が無事でよかったです！」

「う、うん・・・そうだね」

「あと、クローム達もな」

「・・・うん」

各武将の紹介が終わった後、ツナは守護者三人と現状報告をしていた

「とりあえず、整理しましょう」

『ここは、三国志演義の世界である事』

『そして、何故か武将が女である事』

『物語の流れは史実とほぼ一緒である事』

「ぐらいですかね」

「うん・・・っていうか、なんで武将がみんな女の子なんだろう？」

「俺はサッパリわっかんねーなw」

「うん・・・」

「俺は、この世界はパラレルワールドと見ています」

「・・・そっか、『もしも』の世界なら武将が女の子なのも頷けるかも」

「なるほどな！あつたまいいな、獄寺」

「これぐらいは当然の考えだ」

「でも、やっぱりすごいね獄寺君」

「いやあ、それほどでも」

ツナにデレている獄寺をジト目で見ると人たちがいた

「うわぁ・・・これはひどいですねー」

「まったく、予想以上ですね」

「隼人お兄ちゃんはデレデレなのだ!」

「」「」「（じー）」「」

「お、お前ら……！」

それは桃香達、義勇軍の幹部の面々
一様に呆れたように、ニヤニヤと笑みを浮かべている

「これが十代目さんですか」

「……至って普通に見えますね」

「なんか、ひよろいのだ」

「……（じー）」

口々にそれぞれの印象を言葉にする桃香達
諸葛亮と？ 統はじーっとツナを見ていた

「お、お前ら！ 十代目になんて恐れ多い事を！」

「じ、獄寺君！」

「す、すみません、つい……」

ツナに咎められてしょんぼりする獄寺

「はは でも、ツナはすんげー強えぞ」

「鈴々より強いのかー?」

「それはわかんねーなあ」

「よーし!ならば勝負なのだ!綱吉お兄ちゃん!」

「ええ!?ちよ、ちよつとまっつてよ!」

突然の勝負勃発に慌てふためくツナ

そして、勝負は次の発言であっさりと消え去る事になる

「あら、それはこの曹孟徳に刃を向けるということになるのだけれど……いいのかしら?」

「鈴々!……申し訳ありません、曹操殿」

発言の主は華琳。後ろには魏の将たちが控えていた

鈴々の発言に愛紗はペコペコと平謝りしていた

「まあいいわ……で、その二人」

華琳が、獄寺と山本を指差す

「何だよ？」

「何だ？」

「あなたたち、私の元に来ない？」

引き抜き・・・ヘッドハンティングである

「なっ!？」

「か、華琳様!？」

それは獄寺たちだけでなく、義勇軍、果ては魏の将たちまでが驚いた

「悪い話ではないわよ?とくに、隼人にとっては、崇拜する十代目が居るんですもの

ほら、綱吉からも言っただけなさいな」

「ええ!?...ってこと何だけど...どうする?獄寺君」

「.....」

ツナの言葉にうつむき考え始める

チラッと桃香達を見る。その表情は不安に満ちている

獄寺は決意し、山本を見る

「……俺はお前の決めた道にとことん付き合っぜ」

「……へっ……後悔してもしらねーからな」

そう言い放ち、獄寺はツナを見る

「……申し訳ありません、十代目……俺は……俺達はこのつら導かなきゃならないんです……だから、そちらには就けません」

その目にははつきりと決意が見えた
ツナはその目を見て、微笑んだ

「わかった」

「ちよ、ちよっと綱吉!？」

「あはは……ゴメンね？」

「……まったく……もっいいわ!」

苦笑いし、謝るツナを見てはなんともやりきれない表情でその場を立ち去る華琳

そして、それを春蘭と桂花が追いかける

「やれやれ・・・季衣も行ってやれ」

「あ、はい！」

秋蘭に言われて季衣も後を追いかける

「さて、義勇軍の総大将は劉備・・・でよいのか？」

「え、えーつと・・・はい」

「先ほど、斥候がここを襲った黄巾党を発見したのだが
あきらかに数が多く、苦戦は必至という報告があった

どうやら、黄巾党の拠点に逃げ込んだようだ

そこで、お前達、義勇軍の力を借りたいのだが・・・かまわないか
？」

「え・・・えーつと・・・どうしよう？ご主人様？」

「俺に聞くなよ！お前が総大将だろーが」

「まあまあ・・・ここは助けてやってもらいたいんじゃないか？
困ったときはお互い様って言うしな」

「そ、そうですね！わかりました、私達でよければ！」

「そうか・・・ではこのことを華琳様に伝えてくる・・・綱吉、ク
ロームも行くぞ」

「うん・・・獄寺君、山本・・・また後でね」

「十代目、お気をつけて！」

「おう！またなツナ」

こうして、自由時間は終わりを告げた

「いっね」

今、曹操軍と義勇軍は黄巾党の拠点に来ていた
なかなか、大きな拠点で、ある種、街のようだった
そんな折、一人の兵が華琳のもとに駆けってきた

「曹操様！」

「どうしたの？」

「大梁義勇軍なるものの指揮官が協力したいと・・・」

「ふむ・・・指揮官をここに」

「はっ！」

暫くした後、兵が三人の指揮官を連れてきた

「あなたたちが指揮官？」

「はっ！楽進と申します」

「うちは李典います」

「私は于禁っています」

見た目、性格も三者三様の指揮官だった

「で、共に戦いたいと言葉は真か？」

「はっ！大梁義勇軍、曹操様が朽ちるその時まで、我が身が朽ちるまでお使いください！」

三人を代表して、言い放つ楽進。その目に嘘偽りは見えなかった

「……あなたたち、真名は？」

「凧です」

「うちは真桜います」

「私は沙和です」

「いい真名ね。ではこれより私の元で存分に武勇を揮え！」

「」「はっ」「」

そっくり、華琳はツナを見る
そして、ツナは視線をついっと逸らせる

「綱吉！」

「はっ、はいいい!?!」

華琳の怒気を含んだ呼びかけになんと情けない声を上げるツナ

「まったく……この三人と義勇軍を貴方に預けるわ……丁重に扱いなさいよ？」

「わ、わかった……」

こくこく頷くツナを見ては視線を戻し前を見る華琳

「えつと……」

「私は楽進。字は文謙といます」

「ウチは李典。字は曼成います、よろしゅう」

「私は于禁。字は文則なの。よろしくなの」

「楽進さんに李典さんに于禁さんですね、俺は沢田綱吉っていいです
沢田でも綱吉でも呼び方はどっちでもいいです。よろしく」

大梁義勇軍はツナの部隊に組み込まれた

「なあ……お前達はあの人をどう見る？」

「誰って……あの隊長さんかいな？」

「私は……ちよーっと頼りないかなーって思うの」

開戦前、凧たちはひそひそとツナの影響について話していた

「確かに・・・些か不安はあるが」

「どうみても、うちらより年下やし」

「まあ、可愛いけど、それだけじゃなの〜」

(ちよっ・・・丸聞こえなんですけどー)

ツナは心の中でorzになった

そんな中、開戦の銅鑼がなる

他の兵が突撃する中、凧たちは少し出遅れてしまった

「まったく、今度からは気をつけなければ」

「ほんまやな!」

「気をつけるの〜」

「先に行くぞ」

と、三人の横を超死ぬ気のツナが飛んでいった

「「「……え？」」」

馬を走らせながらポカンとなる三人だった

「行くぜ！瓜！」

獄寺が叫ぶと、アニマルリングが光りを放つ

「によおおん！」

『嵐猫Ver. V』（ガット・テンペスタ バージョン・ボンゴレ）の『瓜』が現れ、肩に乗り

NEW SYSTEM C・A・I（ニュー・スイステーマ・シ
ー・イー・アイ）の15個の匣は腰に装着される

「瓜！カンピオ・フォルマ形態変化！」

「によおおん！！！」

瓜フレイム・アローが赤炎の矢に飛び乗り、光りになって合体、『Gの弓矢』アーチエリーとなる

「果てる！トルネード・フレイム・アロー赤竜巻の矢！」

獄寺が弦を引き絞り・・・放つ

その赤竜巻の矢は敵を何人も巻き込みながら、暫くして爆発

「あいつらは・・・俺が守る！」

頭に浮かぶは鈴々や朱里や雛里

・・・やっぱり獄寺は保父さんに向いているのではないのだろうか？

獄寺が暴れだすちょっと前

山本も兵を置き去りにして、最前線に居た

すでにボツクスアニマルは召喚済み

時雨金時を持つ右手で抱えているのは『雨犬Ver・V』（カーネ・

デイ・ピオツジャ バージョン・ボンゴレ）

空を飛ぶ燕は『雨燕Ver・V』（ローンディネ・デイ・ピオツジ

ヤ バージョン・ボンゴレ)

「よし、次郎はこの刀持って下がっててくれ」

「ワン！」

一吠えし、三本の小刀と共に後ろに下がる次郎

因みに次郎とは犬の名前で『南極物語』にもでた樺太犬の『ジロ』
からとつたとかとらないとか

「いくぞ、小次郎！」

すつと小次郎が山本の2、3メートル前に来る

因みに小次郎とは燕の名前で、『燕返し』で有名な『佐々木小次郎』
からとつたとかとらないとか

「時雨蒼燕流 特式十の型

スコントロ・ディ・ローンディネ
燕特攻！」

小次郎から降り注ぐ雨の炎を巻き上げ、突進していく
雨の炎に巻き込まれ、吹き飛ばされる敵兵

「はは、まさか雨の炎に吹き飛ばされるなんて、あんまし強くな
な・・・次郎！」

再びボックスを開匣し、次郎を呼び出し、小刀三本を取る

「小次郎！カンビオ・フォルマ形態変化！」

小次郎が飛翔し、時雨金時と合体する。そして、時雨金時は長刀へと変わり『朝利雨月の変則四刀』になった

「いきなりだが、行くぜ！時雨蒼燕流 総集奥義」

山本が敵のど真ん中に突っ込んでいく

「なんだ！？バカな奴が居るぜ！！」

「やっちまえ！！！！」

数人の敵兵が斬りかかってくる

だが、長刀の雨の炎が広がり、大多数の兵を包み込む

『じゆふか時雨之化』

雨の炎を浴びた兵は動きが恐ろしく緩慢になっていた
そう、スローモーションのごとく

「わりいな！」

といいながら相手を昏倒させていく
殺さずの信念は健在のようだ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

山本が最前線に着いた頃
クロームも最前線に居た

「・・・・・・・・クフフ・・・・・・・・さて」

クロームが骸に変わり、辺りを見渡す
すぐ背後には味方の軍勢が迫っていた

「この状況での地獄道はまずいですね・・・では」

骸の右目が『四』に変わる

第四の道『修羅道』

右目から闘気を出し、格闘能力を上げるスキル

骸は敵集団に突っ込み、三叉の槍で敵を倒していく

「せいぜい、私を楽しませてください」

骸は他人にはドSだと思う

守護者の三人が暴れ始めた頃
ようやく戦場に到着したツナ

「よし・・・行くぞ！」

敵を数人昏倒させ、その場に立つ

「オペレーションX」イクス

『了解デス、ボス』

X BURNER発射シークエンスを開始します』

ツナの掛け声と共に『X BURNER』の発射誘導プログラムが開始された

ツナの両目のコンタクトディスプレイに両手の炎の出力が表示される
ツナは右手を後ろに回し、柔の炎を逆噴射し、左手は前に突き出す

『ライトバーナー、柔の炎、炎圧3万FVファイアンマ・ホルテージで固定。レフトバーナー、柔から剛に変換しつつ炎エネルギーをグローブクリスタル内に充填』

「な、なんだありや!?!」

「どうせハッターだ!突っ込め!」

ツナに気づいた敵兵がツナに突っ込んでくる

「レフトバーナー、炎圧上昇。3万FV。ゲージシンメトリー、発射スタンバイ!」

「イクスバーナー
X BURNER!」

突き出した左手から広範囲に低出力の炎エネルギーが発射される
普通は低出力では撃たないのだが、相手は兵士とはいえ一般人。と

いうことで低出力にした

予想通り、低出力でも兵士に効率的に大きなダメージを与えられた
ようで、かなりの損害を与えられたようだ

「……………」

ツナは何も言わずに敵を倒す

眉間に皺を寄せ、祈るように拳を振るいながら

「うわー……………すごいですね〜ご主人様達」

「な……………なんなのよ……………あいつら……………」

「す、すごいね……………雛里ちゃん」

「そっだね……………朱里ちゃん」

「ここまではね……………ふふ……………やっぱり欲しいわね、
嵐』と『雨』は「

上から、桃香、珪花、朱里、雛里、華琳の台詞である

「た、確かに・・・あれが入ったら戦力増強だけど・・・お、男なのね・・・クッ」

「ダメですよ？苟？さん。ご主人様は渡しませんよ！」

「そこまで執着するほど欲しくないわよ！」

「ふうん・・・桂花はそこまでツナに執着しているのねえ・・・妬けちゃうわ」

「そ、そんな事ないです！私は華琳様一筋です！」

「ふふ、ありがとう」

総大将付近はいつもどおり平和だった

「隊長・・・すごい！」

「なんや！やるやないか！ってかめっちゃすごいわ！」

「まさに、三国無双！ってなかんじなの〜」

間近でツナの戦闘を見ながら感嘆の声を上げる三人
その三人も敵をなぎ倒していく

「楽進、李典、于禁」

「「「はい?」「」」

振り向くと、ツナはX BURNERの発射体制に入っていた

「道を空ける・・・大将まで突っ切るぞ」

「了解!」

「了解や!」

「了解なの!」

「X BURNER!」

直線状の敵を吹き飛ばす

その先には少し偉そうな敵が一人

「いくぞ!」

ツナと楽進たちは敵の大將へと駆けていった

「さ、戦闘も終わったし・・・いったん帰るわよ」

「「「「はっ！」「」「」」

黄巾討伐は楽進が敵を討ち取り、曹操・義勇連合軍が勝利した

「じゃ・・・獄寺君、山本・・・俺は行くね」

「はい・・・」

「また会おうぜ、ツナ」

結局、山本と獄寺は義勇軍に戻り、黄巾党の討伐の旅に戻った

「いいの？今度は敵になるかも知れないのよ」

「・・・正直、嫌だけど・・・その時はその時で・・・ちゃんと相手するから」

「そう」

華琳は頷くと先頭の春蘭に合図をし、行軍を開始させたと、そこに近づいてくる影が三人

「隊長！」

「あ、えっと・・・楽進・・・さん？」

「はい！それで、お伝えしたことが」

「え？何かな？」

「うちの真名、教えたろーおもーてな」

「え!?!で、でも・・・」

「遠慮しないでいいの〜」

「わ、わかったよ」

「ありがとうございます・・・私の真名は『凧』です」

「うちの真名は『真桜』や」

「わたしの真名は『沙和』なの」

「凧に真桜に沙和か・・・改めてよろしく」

「「「はっ!」「」」

「そ、そんなかしこまらなくても・・・ははは」

こうして、改めて三人が仲間になった

第8弾 VS 黄巾党、来る！（後書き）

春蘭、秋蘭、季衣の活躍が……；；

第9弾 黄巾の乱、決着！〜前編〜

義勇軍との共同戦線から半年

華琳の軍は黄巾党の討伐に明け暮れていた

規模は小さいものの、数が多くほぼ毎日出ずっぱりだった

「綱吉！」

「な、何？春蘭」

「出撃だ！準備しろ」

「い、いきなり〜!?!」

ツナはズルズルと首根っこを掴まれて引っ張られていった

「くはめっ」

「くそ！撤退、撤退だ！」

部隊の大多数を失った敵部隊はなすすべなく撤退して行った

「ええい！逃がすか！」

「待て」

「何だ！綱吉！」

「ここは泳がせる・・・凧」

「はっ！逃走した敵を気づかれないよう追え」

「」「」「はっ！！」「」「」

凧の一言で散り散りになる斥候部隊

「泳がせて・・・どうするんだ？」

「うまくいけば・・・奴らの根城がわかる・・・それまでは我慢だ」

「むう・・・仕方が無いな」

後は斥候部隊に任せ、ツナと春蘭は帰還した

「くっ……貧乏くじ引いちまったぜ」

「なんせ、あの『炎の御遣い』の部隊とはな」

「だが……俺達は生き残ったんだ！……必ず戻るぞ！」

「ああ……天和ちゃんが待ってるぜ！」

「地和ちゃん」

「人和ちゃん」

テンション高めに撤退する敵部隊

その後ろを追いかける影に気づかず

「お帰り、ツナ君」

「お帰りなさい、ツナさん」

「ただいま、京子ちゃん、ハル」

「貴様ら！女官風情で隊長になれなれしいぞ！」

「えっ!？」

「はひっ!？」

凧の一言で京子は驚き、ハルはびびってしまった

「凧・・・二人は俺の知り合いなんだ・・・」

「そ、そうでしたか・・・すまなかつたな」

凧が二人に頭を下げる

二人は凧を見てにこり微笑み

「大丈夫ですよ、気にしないでください」

「はい、ハルは大丈夫ですよ！え〜っと・・・」

「楽進だ」

「とりあえず、大丈夫ですから、気にしないでくださいね、楽進さん」

「すなまいな・・・では隊長・・・私は報告に」

「ああ」

凧はツナに一礼してその場から去っていく

「ツナ君・・・まだクールなままだね」

「はい！クールイズダンディーです」

「ハル・・・言葉がおかしいと思うぞ」

「はひ！？す、すみません・・・」

「だが・・・戻らないのは・・・困ったな」

と、三人で悩んでいると、恰幅のいいおばさんがやってきた

「京子、ハル、悪いけど仕事だよ」

「わかりました・・・じゃ、ツナ君また後でね」

「ああ・・・またな」

「はい！シーユーアゲインです！」

二人はそのままおばさんについて行った
そして、どうするか考えていると・・・声を掛けられた

「こんな所にいたのね」

「・・・華琳か」

「・・・なんか雰囲気が違うわね」

「すまないな」

「構わないわ・・・それより風の放った斥候が戻ってきたわ」

「そうか、なら報告を聞きに行こう」

「ええ」

二人はすぐさま玉座の間に向かった

「では、報告を開始して」

「はっ！」

玉座の間には春蘭達、おもな主戦力が集まっていた
そのど真ん中で斥候部隊の隊長が立っていた

「先の戦闘で撤退した部隊を追跡した所、黄巾軍の大部隊と合流、
恐らくは失った戦力の補填に戻ったと思われます」

「なるほど・・・それで、戦力は？」

「恐らくは十万ほどかと・・・そして、これは未確認情報ですが・・・
黄巾党の首魁の人物が現れるとの情報も入ってきています」

「・・・ここで確実に息の根を止めておきたいことね・・・でも
それにはこちらの戦力が足りないわね・・・」

「そう思っています!」

ない胸を張って前に一步出たのは桂花

「既に、孫策、袁紹、公孫贇に檄文を送っておきました」

「・・・そう・・・孫策か公孫贇に少ない希望を持ちましょうか」

「・・・袁紹ではダメなのか？」

ツナがふとした疑問をぶつけてみる
すると、華琳が震えだした

「誰があんなアバズレに頼むもんですか・・・」

どつちら、色々あるらしい

「わかった・・・返事は最速でどれぐらいで届くんだった？」

ツナが桂花に聞いてみる

「そうね・・・早くて明日かしら」

「……出撃の準備だけはしておいたほうがいいな」

「ええ……各員、いつでも出撃できるようつにしておいてちょうだい」

その場は一旦解散となり、檄文の返事待ちとなった
そして、その返事は、二日後に来た

第9弾 黄巾の乱、決着！〜前編〜（後書き）

初の前後編・・・

実はいきなりの再起動で消えてしまったから

こまめなセーブは必要ですね

第10弾 黄巾の乱、決着！〜後編〜

「たいちよ〜・・・まだつかんのかいな〜」

「私も疲れたの〜・・・」

「も、もう少しだから・・・あ、見えたよ!」

「ホンマか!？」

「あたしが一番乗りなの〜」

「ちょお待てや!沙和〜!」

ツナがそういった途端、沙和が一目散に走り出し、真桜が慌てて追いかける。それをみて凧が軽いため息をつく

「申し訳ありません・・・隊長」

「はは、大丈夫だよ。凧」

申し訳なさそうに謝る凧に笑みを浮かべるツナ

そう・・・今、ツナは黄巾軍の本隊・・・から二十里の地点に向かっていた

（数日前）

「檄文の返事がきたそうね」

「はっ！・・・まずは孫策殿ですが、黄巾党討伐のため、兵二万を送るのです」

「そう、で・・・公孫贇はどう？」

「は・・・公孫贇殿は黄巾賊の侵攻が激しく、とても共闘は出来ない・・・とのことですよ」

「なるほど、公孫贇の援助は期待できないようね・・・準備は出来ているわね！では・・・」

「華琳、まだ袁紹の返事がまだだと思っただけ・・・？」

すっと立ち上がった華琳が不機嫌そうにツナを見下げ

「どうせ『あんなちんちくりんな生意気の小娘の手伝いなんて出来ませんわ』……とか言ってるんでしょうね」

わなわなと拳を握り締めて震える華琳に少し同情してしまったツナであった

「！……いえ、どうやら兵を派遣してもよいと書いてありますが……？」

「あら……？珍しいわね……読んでみて」

「え……ほ、本当に読んでも……？」

「ええ、早く読みなさい」

「わ、わかりました……先ほどの分の続きに『華琳さんが床に額をこすりつけて土下座して泣いて頼むのであれば兵五千を送ってもよろしくですよ』……と書いてありますが」

「……」

これ以上なく震えて、それが収まれば何事も無かったように言い放つ

「まあ、今回は孫策の協力だけでいいわ・・・各人、準備が出来次第、出立せよ！」

「「「「「はっ！！！！」」」」」

と、言う事で今ここには曹操軍の本陣が敷かれている

(・・・どうしようか)

ツナは悩んでいた

最近、ハイパー化すると、元に戻れなくなってきた
リボーンに聞いたが

『さすがにわかんねーな・・・とりあえず、この戦のあとに華琳に
事情を話して出撃を控えるのが一番だな』

(そのほうが良いか・・・)

一息ため息をつき、華琳のいる大天幕に向かった

「全員揃ったわね・・・では、軍議を始めるわ・・・現在の状況は？」

「そ、それが・・・この数日の内に本隊に複数の部隊が合流し、見立てでは兵が十五万ほどに膨らんでおります・・・」

「厄介ね・・・孫策の軍は？」

「ここから約二十里の北東に陣を敷いています」

「・・・まずは間諜を送るわ・・・綱吉！」

「え！？お、俺？」

「ええ、何人か斥候をつけるわ、偵察に行つてきなさい」

「・・・しょうがないなあ・・・で、何を調べてきたらいいの？」

「首魁の名前に敵の戦力、食糧の場所に・・・後は目的ね」

「・・・うん、わかった、じゃ、行つてくるよ」

天幕を出て行くツナ・・・が歩を進める足をクロームに向け、近寄る

「ボス……？」

「クローム、これ」

クロームが手渡されたのはチヨイスの時に山本と獄寺が使用していたイヤホン型の通信機
ツナのポケットに入っていたらしい

「目的地に着いたら、通信入れるから、華琳に俺の言葉を伝えてほしいんだ」

「はい、ボス」

「うん……頼んだよ」

そう言っつては急いで天幕を出るツナ

「……んぐっ」

死ぬ気丸を飲み込み、ハイパー化する

「これ以降は……控えないとな」

そう言い、ツナは縄で繋いだ斥候とともに本隊のほうに飛んでいった

「では、俺はこの乱を起こした奴の事を調べてくる、食糧と戦力、黄巾党の目的は各自調査してくれ」

「「「はっ!」「」」

斥候の三人は敵の中に紛れていった
どうやら、遠くになにやら舞台らしきものが設営されているが、ここからではあまりにも遠すぎる

「仕方ないな」

時間がかかるが、回り込んで前列まで行く事にした
そこでツナは驚くべき物を目にした

「……………なんだこれは？」

煌びやかな装飾に、明るい色のライトの照明、そして上を見上げると『数え役満 姉妹』かかれた看板

「かぞえ……やくまん………しまい？」

「沢田様！」

三人の斥候が戻ってきた

「どうだった……？」

「食糧はこの舞台の後ろのほうにありました」

「戦力は、見た感じ変わっていませんので、恐らくは報告どおりかと」

「黄巾党の目的ですが、どうやら漢王朝の転覆を狙っているものと思われまます」

「……そうか……引き続き調査をしてくれ。何か解ったら報告に来てくれ」

「」「」はっ！」「」

そうやって三人は再び人ごみに紛れていった

「・・・・・・・・クローム・・・聞こえるか？」

ツナはヘッドホンに付いた通信機でクロームに話しかけた

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

本陣の・・・黄巾党本隊が見える高台にクロームは立っていた

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ・・・」

『クローム・・・聞こえるか？』

耳につけたイヤホン型通信機からツナの声が聞こえた

「ほあっ！ほあっ！ほああああああっ！……！！！」

聞こえてきたのは通信機からの黄巾党の雄叫び

「え？……はい……あの……」

「なに？」

「首謀者は……張角、張宝、張梁の三人……」

「聞いたこと無いわね……」

「でも……黒幕がいるかもしれない……と」

「……」

「どうしますか？華琳様」

「……クローム、綱吉に伝えなさい。私達が戦闘を行っている間に、黒幕を捕まえなさい。その中で戦闘をせず、三人に付き添っているものが恐らく黒幕でしょう」

「……わかったって」

その言葉を聞き、華琳は立ち上がる

「これより、黄巾党との最終決戦である！各人、心してかかれ！それと孫策にも戦闘を開始すると伝えて」

「「「「「はっ！！！！」「」「」「」

今、黄巾党との決戦が始まる

「ありがとう――！！！！」

「「「わあああああっ！！！！」「」「」

丁度、舞台では張三姉妹のライブが行われていた

「いつもの行くよー！みんな大好きー！！！！」

「「「「「てんほ――！！！！ちゃ――！！！！ん！！！！！！！！！！」「」「」「」

「みんなの妹――！！！！」

「「「「ちー……ほ……ちや……ん……!」」」」

「とっても可愛い」

「「「「れんほ……ちや……ん……!」」」」

「「「みんなありがと……!」」」

張角……天和てんほうが手を振っていると、遠くに何かが見えた

「ちーちゃん……あれってまさか……」

「あれは……孫策軍!？」

地和は遠くの牙門旗に『孫』の文字が見えた

「……向こうからも」

人和が指差すほうを天和がみると孫策軍よりも規模の大きい軍が迫ってきていた

牙門旗には『曹』の文字

「ど、どうしよう……」

「な、なら！みんなに守ってもらおうのよ！」

「ちー・・・姉さん？」

「みんな！私達を守ってえ！！！」

地和ちへいがマイクで叫ぶと、今まで盛り上がっていた集まりが武器を持ち、軍に向かっていった

「やった！」

「さすがちーちゃん！」

「これはお三人方！」

「あなたは・・・管理者さん」

舞台袖から出てきたのは二人の男
今回、黄巾党が集まるここでのライブを三人に進めた管理者・・・
マネージャーだ

「ささ、お三人さんはこちらに」

「は、はい...」

三人は二人の男に連れられて舞台から消え去った

「くっ……！」

ツナはいきなり沸いた大きすぎる雄叫びに驚いた

「何て雄叫びだ……ん？」

通信機にクロームからの通信が入った

『ボス』

「何か、あったのか？」

ツナはクロームから華琳の伝言を聞いた

「……わかった……」

『気をつけて……ボス』

通信が切れると、曹操軍の陣とは違つほうから馬の足音がした

「……孫策軍か」

やって来る軍に向かい、本隊の半分の部隊が孫策軍に、もう半分が曹操軍に向かった

「……急がないとな……!!」

舞台を見上げると、既に張三姉妹はいなくなっていた
ツナは急いで舞台裏に向かった

「君達、邪魔だよ」

「ぐわああ!!」

「な、なんだこいつ!」

「くっ! 怯むなー! 我らには天和ちゃんや地和ちゃん、人和ちゃんが付いているんだ、負けるはずが無い!」

「勝手に群れてると・・・咬み殺すよ」

向かってくる敵兵を何の躊躇もなく薙ぎ倒していく雲雀

「どけどけえい! この夏侯惇元讓を恐れるものがおらぬなら、かか
つてこーい!!!!」

雲雀の横を名乗りを上げながら通り過ぎていく春蘭

「君、騒がしいよ」

「何!?!」

「姉者! 今はそいつに構っている暇は無いぞ!」

「くっ・・・! 覚えて置けよ!」

「……フン」

その場から立ち去る春蘭と秋蘭を見て、鼻を鳴らし再び敵兵を倒していく雲雀

因みに、雲雀にも部隊がある『並盛風紀委員会』らしい……

「きゃっ!」

「ちー姉さん!」

「悪いが、『太平要術の書』は返してもらおう……俺はこれを張讓様に渡してくる……お前は三人を始末してくれ」

「ああ、わかった」

一人が森の中に消え去る

そしてもう一人の男が三人を見ながら下種な笑みを浮かべる

「さて……お前達には悪いが死んでもらおうか……黄巾の乱の

首謀者としてな！」

「そ、そんな！あなたたちがあの書を使えば売れるっていたんじゃないの！」

「そうです。あなたたちが私に管理は私達に任せてあなたは歌に歌手に専念してくれって言いましたよね？」

「ああ、言ったさ……だが、それもこれも張讓様のため……では、そろそろ死んでもらおう……か！」

男が剣を振り上げ……振り下ろした！

「つつ……！」

天和達は恐怖のあまりに目を閉じた

ガキン……！！

いつまでたっても振り下ろされない剣に疑問を感じ、天和達は目を開けてみる

その目に映った光景は、知らない男が剣を止めている光景

「何をしている」

「だ、黙れ！貴様もあの世に送ってやる！」

一旦離れ、両手で剣の柄を握り、ツナに突きを放ってきたが、ツナは刀身を掴み、死ぬ気の炎で溶かし折る

「な、なに!?!」

「暫く眠ってもらおうか」

「ぐっ……!?!」

首に手刀を当て、気絶させる
そして、ツナは操られていた三人を見た

「あ……あの?」

「な……なによ!?!」

「……」

普通は見えないが、今のツナには三人を取り巻く妖力がありありと見えた

「すこし・・・じつとしている」

そう言うと、ツナは死ぬ気の炎を纏った手を順番にかざす
すると、それまで渦巻いていた醜悪な妖力は浄化されて、消え去った

「あ、あの・・・あなたは一体・・・？」

「少し、そこで待っている」

ツナは、クロームに通信を取った

「・・・厳しいわね・・・やっぱり数が足りなかったかしら」

「・・・！！・・・ボス！」

いきなり喋りだしたクロームに驚く華琳
なんなのかと目をしばたかせながら見ていると、クロームが話し
かけてきた

「あの……三姉妹と……黒幕……捕まえたって……ボスが」

「あら、そつっ？」

「……それで、出来たら来て欲しいって……」

「しょうがないわね……あなたも付いてきなさい」

「え？……は、はい」

「……お、俺は何を？」

「てか……ここどこだ？」

天和達の妖力がなくなったために、全ての兵が正気に戻った
だが、ここで彼らは、地獄を見る

「君達は全員、逮捕するよ……カンピオ・フォルマルール、カンピオ・フォルマ形態変化」

ボックスを開匣、雲ハリネズミVer.V（ポルコスピーノ・ヌーヴオラ バージョン・ボンゴレ）を呼び出す
因みに名前は『ロール』。草壁や獄寺は『バリネズミ』と呼んでいたが、雲雀は『ロール』と呼んでいる
そのロールが光になり、手錠になる。これが初代雲の守護者と同じ武器の『アラウディの手錠』である

「君達全員、逮捕するよ」

雲雀は、的確に手首と足首に増殖する手錠を掛けていく

「うわ、なんだこれ!?!」

「う、うごけねえ!」

「くっそ〜!!!!」

次々と手錠を掛けていく雲雀
その途中で、視界に華琳が乗る馬が入った。そして、後ろに乗るクロームも見えた

「雲雀い〜」

丁度そこへ雪蓮が馬に乗ってきた

「ねえ、僕を乗せてあの馬を追ってくれないかな？」

雲雀が指す先には華琳の乗る馬が見えた

「お安い御用 その代わり、今度戦ってね？」

「・・・気が向いたらね」

雪蓮は雲雀を乗せて、馬を駆ける。華琳を追って

「・・・」

ツナは木にもたれて、華琳の到着を待っていた
張三姉妹はとくに逃げるそぶりも無かったため、縛ったりはしてい

なかった

ただ、黒幕と思われる男は縄で木に縛り付けてある

「綱吉！」

暫くして、華琳とクロームがやってきた

「で、件の三姉妹は、これ？」

華琳が三姉妹を見下ろす

その視線に身体をびくつかせる三姉妹

「事の経緯は既に聞いたから、俺が話そう」

そしてツナは話し始めた

三姉妹は最初はしがない旅芸人だった事

そこで縛られてる男ともう一人の男に『太平要術の書』を受け取った事

そして、その二人にその書を使えば人気を獲得できると唆された事

「なるほどね・・・」

「それからずっと後はこの男ともう一人の男の言つとおりには操られ

てたということだ」

「で、そのあなたは誰の差し金かしら？」

縛られた男に近寄り話しかける華琳

だが、返ってきた言葉は辛辣なものだった

「はっ！誰が喋るかよ！このアバズレが！」

そう言つて、唾を華琳の靴に吐き捨てる

刹那、男の首と胸はすっぱりと離れていた

「華琳！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ツナが咎めるも、華琳は冷たくなった男を見たまま

「・・・・・・・・・・華り・・・・・・・・」

「見つけたよ」

突然の声に振り向くツナその視線の先には・・・・雲雀がいた

「沢田綱吉・・・さあ、やるっ」

ここに、大空対雲のあつてはならない戦いが始まる

第10弾 黄巾の乱、決着！〜後編〜（後書き）

最近、従兄弟が不良予備軍になりつつある今日この頃w

第11弾 く決着後く ツナ対雲雀、来る！ そして、乱の終幕

「なつ・・・雲雀!？」

「いくよ」

雪蓮・・・孫策が馬を止める

その馬から飛び降り、そのままツナに向かい疾走する

「止める!雲雀!」

「君の都合なんて、僕の知ったことじゃないよ」

トンファーを振り下ろす雲雀、右手の甲のクリスタルで防御するツナ
その衝撃で巻き起こる強風が華琳達を遅い、吹き抜ける

「っ・・・いきなりなんなのよ・・・!」

「彼はね、雲雀って言うてうちでも一、二を争う実力者よ」

「孫策・・・!」

華琳は死神鎌『絶』を構え身構える

「待って待って！・・・私は戦う気はこれっぽっちも無いわよ？」

「あら、私の部下が攻撃されてるのよ？攻撃の意思はあると見るのが普通じゃなくて？」

「そ、そんなんだけど・・・ちよっと！雲雀、止めなさい！」

雪蓮の声に視線だけ移し、言葉を吐き捨てる

「外野は黙っててよ・・・邪魔をするなら、後で咬み殺すよ」

どこまでも、唯我独尊な雲雀であった

「くっ・・・！」

ツナが左手で雲雀の横っ面をなぎ払う・・・も既に雲雀は離れており再び、攻撃してくる雲雀を避けるかのように空を飛ぶ

「・・・ロール」

『キュイイイ！』

手錠から戻ったロールが当たり一面に棘の付いた玉状のものを出現させ、雲雀はそれを伝いツナを追う

「……………オペレーションX」

『了解です、ボス』

X BURNER発射シークエンスを開始します』

ツナは右手を突き出し、左手を後ろに突き出す

「ワオ……………いきなりかい？……………ロール」

『キュイツー！』

X BURNERの射程外からロールが先ほどの球体をガードにまわす

そしてそれはどんどんと増殖してきている

「来なよ……………」

『レフトバーナー、炎圧上昇。柔の炎、炎圧30万FV。ライトバーナー、炎圧上昇
26万……………27万……………28万……………29万……………30万FV、ゲ

「ジシンメトリー、発射スタンバイ！」

「X BURNER AIR！」

綱吉の右手から、高密度の圧縮された炎エネルギーが放たれる
そして、それをガードする雲雀

「…………ボス」

「あれを一回見たけど……全然本気じゃなかったってことね……
フフ……すごいわ」

「そして、あれをとめる雲雀もすごいわね……沢田綱吉か……
あの子ともやってみたいわね」

「はああああ……!!!!」

「くっ……!!」

暫くの拮抗の後、雲雀がX BURNERに飲み込まれた

「僕はまだ負けてないよ」

「はいはい、そんなぼろぼろの状態じゃ説得力無いわよ」

「っ……離さないと、咬み殺すよ」

「今のあなたじゃ、明命にですら勝てないわねえ」

今、雲雀は雪蓮に肩に担がれている

結局、あの後近くで倒れている雲雀を雪蓮が見つけた、この状況になっている

「じゃ、またね……？あ、もしよかつたら君も来ない？綱吉君？」

「おあいにく様、彼は……」

ツナが華琳の言葉を制止し

「悪いが、俺はここを離れる事は出来ない。他を当たってくれ」

「もう……つれないのねえ……ま、いいわ。じゃ、また戦場で」

「沢田綱吉……次は君を咬み殺すよ」

そう言いながら、雲雀はなんとも格好の付かない姿のまま帰っていた

「とりあえず・・・勝ち鬨も上げたし・・・そろそろ、帰りましようか」

華琳は、張三姉妹の処分については、保護する事にした
元々、人を惹きつける才覚を三人は持っていた

今回はそれを役立たせる事を条件にし、保護を決めたのだ

そして、張三姉妹は死んだ事にし、名は真名だけ名乗るようにさせた

その三姉妹は既に陣に連れて行ってもらったようだ

「ああ」

「・・・・・・・・綱吉」

「なんだ？」

「空を飛べるなら、一回私を乗せなさい」

「・・・・・・・・は？」

突拍子も無い華琳のお願いに変な声を出してしまう綱吉

「いや・・・無理だろう?」

「あなたならできるわ」

「だが・・・」

「やるのよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はあ」

ため息をつき、やむなく実行する事にした
因みに、ハイパー化したツナがため息をはじめてついた瞬間・・・
だとか

「準備はいいか?」

「ええ」

胴に手を回し頷く華琳

「ボス・・・大丈夫?」

「ああ、クロームは兵と一緒に帰っててくれ」

「・・・わかった」

頷き、数人の兵と華琳が乗ってきた馬と共に帰っていった

「行くぞ」

ツナは、慎重に炎を噴射し、すーっと空に浮かび、上昇する

「す、すごいわね・・・」

「しっかり掴まっておけよ・・・」

「う、うん」

いつものようにうつ伏せの状態で飛行を開始する
因みに華琳の身体は意外に小さかったのでツナの体でも乗っかる事が出来た

「すこし、風がきついわね」

「すまない・・・だが、これ以上速度を落とすと落ちる」

「そ、そう・・・」

ぎゅっと手に力を込める華琳
その体の温かさに、奇妙な安心感が広がる

(ま・・・たまにはこういうのも悪くないわね)

その頃・・・

「秋蘭、そっちはどうか？」

「ああ、今終わった・・・帰ろうか姉者」

「そうだな！・・・ん？」

丁度、事後処理を終えた春蘭と秋蘭
一息つき、帰ろうとした春蘭が見たのは

「綱吉・・・だな」

「ああ」

ハイパーツナ。丁度、飛んで帰っている頃だ

「で・・・上に乗っているのは・・・」

「ああ、あれは華琳様だな」

「なんだ、そうか・・・つて、華琳様!？」

春蘭が再び目をやると、確かに華琳が乗っていた

しかも、恥ずかしそうにぎゅっと体に手を回して抱きついてる・・・
ように春蘭には見えた

まあ・・・実際そうなんです

「つうなあああよおしいいいい!!!!!!!!」

まるで、物凄い恨みのある敵を見たかのような表情でツナを追いかける春蘭

「まああああてええええ!!!!!!!!網吉いいいい!!!!!!!!」

「ああ・・・まったく、可愛いなあ姉者は」

その様子を、うつとりとした表情で見ながら馬を駆って追いかける

秋蘭

かくして、ここに黄巾の乱は少しの謎を残したままであるが、ここに終結した

第11弾 く決着後く ツナ対雲雀、来る！ そして、乱の終幕（後書き）

今回、めっちゃ短いWWW

なーんか、袁術物の小説が書きたくなってきたW

第12弾 日常編〜ツナの日常・華琳の昇進〜（前書き）

ここからは日常編をお送りしたいと思います〜

そして、負けた雲雀は必ず帰ってくる・・・ある意味ターミネータ
ーだしw

第12弾 日常編くツナの日常・華琳の昇進く

「……………」

俺の名前は沢田綱吉

どこにでもいるごくごく普通の中学生。何をやってもダメダメなことから『ダメツナ』と呼ばれていた。だが、俺の家に家庭教師・リポーンがやってきてからその日常は変わっていった

そして今回は、特に変わっていた。今俺達がいる時代、場所は後漢・…いわゆる三国時代の中国らしい
何故飛ばされたかはわからない。だが、リングの力かもしれないとリポーンは言っていた

「起きるか……………」

因みに今の俺は、体は普通だが、目付きや思考、言動がハイパー化のままになっている

これは流石にリポーンでもわからないそうだ

「着替えよう……………」

俺は服が入れてある棚からYシャツを取り出し、袖を通す。これも不思議な事だが、何故か私服はなく・・・かわりにスーツ（未来で着用した物）が着ていたのとは別に一着、リボンから渡されたリボン曰く『近くに落ちてた』らしい
無いよりはマシだったから俺は受け取った

そして、ズボンに足を通し、ネクタイを締めているところ、いきなり扉が吹き飛ばかのごとく開かれた

何事かと目をしばたかせて見ていると、現れたのは春蘭だった

「綱吉！まだ寝ているのか！？」

「いや、起きているぞ」

「そ……！！……それならそうと早く言え！」

この不機嫌な彼女は、名前を夏侯惇という。どうやら、この世界はほとんどの武将が女性という、パラレルワールドらしい。だが、その強さまでには変わっているわけではなく、戦場に出れば敵に恐れられるほどの猛将だ

俺は、上着を羽織り、その猛将に話しかける

「で、何の用だ？華琳が呼んでいるのか？」

「そうだ。待たせるわけにはいかん、さっさと行くぞ」

「・・・わかった」

俺は、春蘭の後に付いて行った

「遅かったわね」

「はっ！申し訳ありません、華琳様！」

「気にしなくて良いわ・・・いつもよりはマシだから」

ここ、玉座の間にて、ただ一人椅子に腰掛けるこの少女、名前は曹操。あの『乱世の奸雄』と呼ばれた誰もが知っている三国の武将。姿形は少女だが、その姿とは似ても似つかない霸王としての資質を兼ね備えた物凄い少女だ

今日は、この間の黄巾の乱を治めた功績として昇進するらしい

「もう暫くしたら、王朝から何進かしん將軍が来るわ、各々、失礼の無いように」

い。ただ、ここにいないのだ

「あ、あれ？ちよ、ちよい失礼しますわ！」

慌てふためいて一旦その場を後にした張遼

一息ため息をつくと、横にいた季衣が話しかけてきた

「ねえ、ツナ兄ちゃん」

「なんだ？」

「呂布ってどんな人なんだろうね？」

「さあな・・・だが、ワガママな人間だと、いろいろ苦労しそうだな・・・戻ってきたな、静かにしているよ、季衣」

「はい」

季衣が静かに返事をすれば、ばたばたと慌しく戻ってきた張遼が苦笑いでそこにいた

「えらい遅うなってますんません、もうすぐ来ますんで・・・」

そして、少しして現れたのはエメラルド色の髪をした少女と赤い髪

の二本のアホ毛が特徴的な女の子

「おほん、呂布殿のおなりですぞー」

いや、そこにいるだろ

と、ツッコミを入れてしまいそうになったツナ

「・・・・・・・・」

じっと黙ったままの呂布

どうやら、無口な性格のようだ

「では、曹操殿こちらへ」

「はっ」

華琳が呂布に近づいていく

俺がそれを見ていると

「・・・・・・・・・・・・・・・・（じー）」

呂布がじっとこっちを見てきた

・・・なんなんだろうか？

「こほん、このたびの黄巾党討伐、大儀であった！と仰せなのです」

いや・・・なんで小さいほうの少女が喋っているんだ？

しかも・・・仰せなのですと言ってはいるが、相も変わらず呂布の視線は俺に向いたままだ

「して、張三姉妹の首級は？と仰せなのです」

「首を奪われる事を恐れ、自ら自刃し、その後火矢が放たれ、炎の焼かれてしまいましたので生きてはおりませんでしょう」

事実はこの城で生活しているのだが・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

相変わらず、無口な呂布だが横の少女は構わずに言葉をつむいでいく

「これでは手落ちだと呂布殿もお怒りですぞ」

「申し訳ありません」

心なしか、華琳の声が低くなっている

「……まあいい。本日は貴公の功績を称え、曹操殿を西園八校尉に任命するとの陛下のお言葉を伝えに来た！と仰せなのです！」

「はっ、謹んで拝命させていただきます」

「うむ、これからも陛下のために尽くすように」

「……」

呂布は収支無口なまま、俺を見ながら張遼と小さい少女と一緒に帰っていった

「まったく、なんなのかしらね……あの名代は」

「確か、呂布奉先と言って『飛將軍』と呼ばれ、その強さは三国無双と言われています」

「そんな事どうでも良いわ……まったく……なんで綱吉を見てたのかしら」

どうやら仕事中に話もせずじっとツナを見ていたのが気に食わないらしい

「本当か？綱吉」

「ああ・・・何でなのかは俺もさっぱりわからない」

「大方、戦場での功績と『炎の身遣い』と言う名に興味を持った所でしょう」

「そして、隙あらば引き抜く・・・か、姑息ね」

本当にそうなのだろうか？

俺はそんな腹黒い人には見えなかったが・・・

「ツナ兄ちゃん・・・ここから出て行くの？」

じつと季衣が不安そうに見つめてくる

俺は季衣の頭を優しく撫でる

「俺はどこにも行かない・・・安心しろ」

「そっか・・・えへへ」

嬉しそうに笑みを零す季衣

俺はこの笑顔に癒された気分になる

「とりあえず、この場は解散しましょう」

華琳の一言でこの場は解散となった
明日からは、また忙しくなりそうだ

第12弾 日常編／ツナの日常・華琳の昇進／（後書き）

今回は華琳の日常です

第13弾 日常編〜華琳の日常〜

私の名前は曹孟徳。みんなは曹操のほうがりやすいかしら？
今日は特別に私の日常を少しだけ紹介するわ

「おはようございます！華琳様」

「おはようございます、華琳様」

今、挨拶して来たのは私の古くからの家臣、夏侯惇と夏侯淵。少しやかましくて少し抜けているのが夏侯惇で、物静かで賢そうなのが夏侯淵。二人とも、良く尽くしてくれている

「おはよう、春蘭、秋蘭」

さっと歯磨きと目覚めの洗顔をして待たせてある二人を連れて朝食をとり部屋に向かう。ちなみに朝、歯磨きしないで何かを食べると寝ている間に増えた口の中の雑菌を身体に取り込んでしまうと、
綱吉に聞いたわ

「おはようございます、華琳様」

「おはよう、桂花」

部屋に入ると、すぐさま挨拶してくる女の子が一人

この子の名前は荷？。私の軍の軍師を務めている

たまに『お仕置き』してあげるとすごく喜んでくれるからつつい
いじめてしまう

そして、私と挨拶してすぐにその表情をぶすつとさせる。その原因
は、隣の男にある

「おはよう、華琳」

「ちやおっす、華琳」

「おはよう、綱吉、リボン」

この男は沢田綱吉。炎を纏う天の御遣い、略して『炎の御遣い』と
して軍に入っている

たしか、ぼんごれふぁみりー・・・とか言う組織のボスとかいう役
職の候補らしい

今日は、桂花のお仕置きのために桂花の仕事の見学をさせる予定だ
その綱吉の肩に乗っているのはリボン

姿は赤ん坊だが、その知識はなかなかのもので、いろいろ助言をも
らっている

「おはようございます！華琳さま！」

「…………おはよう…………華琳」

「おはよう、季衣、クローム」

先に挨拶してきたのが許？。私の親衛隊の隊長で怪力少女

この子が入ってから食糧が足らなくなるといった事もしばしば起
るようになるほどの大食漢…………らしい

そして、後の挨拶してきたのがクローム髑髏。私達はクロームと呼
んでいるわ

綱吉と同じく『炎の御遣い』として軍に入っている。この子の体は
いろいろとワケアリな体質みたい

「綱吉、あの三人は？」

「今日は夜の警邏があったから、今は眠っているだろう」

「そう」

あの三人とは、楽進、李典、于禁の三人
もともと、義勇軍に居たのだが、共に戦いたいという志を尊重し、
義勇軍ごと受け入れた

今は綱吉の部隊の副隊長として頑張ってもらっている
あまり付き合いが無いので、今度あったらいろいろ付き合ってもら
うとしてよう

「皆さん、おはようございます！」

「みなさん、グッドモーニングです」

みんなの所に食事が並べられていく

今私達の食事を運んできた女官、笹川京子と三浦ハル、この二人も
綱吉の仲間

今はこの女官として働いてもらっている。綱吉も了承してくれた
いつかだったか、「この二人は手を出すな」と綱吉に釘をさされた
ことがある

・・・ま、それでも手は出さずとおもっけど

「さ、いただきますようか」

「「「「「いただきます！」」「」「」「」

朝食を終えた私は玉座の間に居る

私に謁見したい子が居るといふ事で待っている

「お初にお目にかかります、私は郭嘉と申します」

「わたしは一程？ともうしますー」

「で、郭嘉に程？、私に何か用か？」

「はっ、是非とも、私たちを曹操殿の軍に加えていただきたく参上した次第です」

「太陽とはこの世に輝く英雄の事・・・私はその英雄に仕え、その日輪をこの手で支えたいのですー」

「その日輪とは、私のこと・・・と思っっているのかしら？」

「はいー」

なるほどね・・・容姿も合格点だし・・・

「あなた達は見たところ・・・智に優れているようね」

「おお！さすがですねーそんな事までお見通しとはー」

「はい、荀？殿は類まらない才をお持ちでしょうが、それは実践において私に劣ると見ています。私を加えてくだされば必ずやこの智、必ずお役立ていただけるものと確信しております」

かなりの自信があるようね
と、その時玉座の間に入ってくる人影が

「華琳、少しいいか？」

入ってきたのは綱吉

「あら、今は取り込み中だからまた・・・」

「おおっ！？あのおにーさんではないですか」

「あら・・・お久しぶりですね」

「確か、程立と戯志才だったか？」

「いえ、今は程？と郭嘉と名乗っています」

「そうか」

「それにしても、おにーさんも雰囲気変わりましたねー」

綱吉は二人と話し始めた。どうやら前に一度会った事があるようだ

(にしても、私に用があるんじゃないのかしら・・・)

仲良く話してる綱吉を見ていると無性にイライラする・・・病気が
しら？

「綱吉、私に用があるんじゃない？」

「・・・そうだったな・・・今日の報告書だ後で見えてくれ」

「わかったわ・・・ところでその二人と知り合いなの？」

「ああ、この時代に来てすくな・・・その後すぐに別れたがな」

「そう・・・」

「・・・入れてやったらどうだ？」

「この間は袁紹殿のところに行きましたが・・・仕えるべき王では
なかったのですよ」

それはそうだ、あんな女に仕えるほうがどうかしている

・・・どうやらこの二人は使えそうだし・・・ふむ

「いいわ、その智私のために存分に振るうがいい！」

「ははっ！」「ははっ！」

こうして、私の元に新しく二人入ってきたのだった

「さて・・・と」

仕事を大方済ませた私は最後に綱吉の報告書を見た

「治安は良い。特に誰が暴れているとかは無し、街の方も至って汚れは無く、また民の捨てる塵屑も減っている模様・・・」

ふうん・・・なかなかの効果ね

たしか、街の塵屑を減らす策を提案したのは綱吉だったわね

・・・もう少し、天の街について綱吉に聞かないといけないわね

「綱吉、居る？」

「・・・なんだ？」

今は綱吉の部屋に来ている
折角だから天の街について聞きに来たのだ

「綱吉の街について聞きに来たのよ」

「そうか・・・で、何を聞きたいんだ？」

「そうね、夜ってなにか露店とかあるのかしら？」

「そうだな・・・現代にはコンビニがあるな」

「・・・コンビニ？」

「朝から夜までずっと開いている・・・主に食べ物や日用雑貨を売っている店なんだ」

「そう・・・興味深いわね」

一晩中開いてる店なんて聞いたことが無かったのでこの話にすごく惹かれた

他にも、子供の頃から物事を教え込む学校とか色々な遊戯具がある遊園地の話などいろいろ聞かせてもらった

「なかなか興味深かったわ・・・ありがとう」

「気にするな」

「・・・ところで、あなた京子と付き合ってるのかしら？」

「いや・・・付き合っていないが・・・？」

私は心の中でほっと安堵のため息を付いた
でも、安堵するなんて・・・やっぱり病気なのかしら

「そう、なら私が手を出してもよさそうね」

「おい・・・」

「冗談よ・・・ほんと、可愛いわね」

「うるさい」

綱吉はそっぽ向いてしまった・・・ちよっとからかいすぎたかしら？

「まあ……この争乱が終わるまではちゃんと守ってもらおうから、そのつもりで」

「ああ、わかっている」

不意に私の頭を綱吉の手が撫でる
う……意外に心地良いわね……

「わ、私はそろそろ寝るけど……綱吉は？」

「ああ、俺も寝ようか……」

「じゃ、また明日」

「ああ」

私は、綱吉の部屋を出て、自分の部屋に戻る
そして、早々に布団の中にもぐりこむ

「……………」

まだ何となく綱吉に撫でられた感触が残っている
それを感じるたびに胸が熱くなる……まさか……ね

(でも・・・今日はいい夢がみられそう・・・)

また明日も・・・撫でてもらおうと思いつつぐっぐりと眠りに落ちた

第13弾 日常編〜華琳の日常〜（後書き）

次回は・・・誰にしよう

第14弾 日常編〜桂花の日常〜

私の名前は荀？、字は文若

今日は私の日常を教えてあげるわ

朝起きて、顔を洗い朝食をとったあと、私は部屋にこもり、竹簡や書簡の整理をする

街の区画整理や治水工事などなど、書く事は様々である

そして、一番面倒くさいのが、ほかの武将の報告書である

例えば…春蘭の場合

「ちよつと、春蘭！」

「ん？桂花ではないか、どうした？」

「どうしたもこうしたも無いわよ、これ！」

春蘭に見せつけたのは、何が書いてあるかわからない竹簡

「ん〜？なんて書いてあるかわからんな…誰が書いたんだ？」

「アンタでしょうが！アンタ！」

「なんだと！？私がこんなものを書くわけないだろう！」

「ま、大方・・・この間の戦闘の報告書だと思っけど」

改めて見ると・・・
ホント汚い字ね、稀に見る汚さだわ

「まだ、綱吉の方が綺麗に書けるんじゃないかしら？」

「なに！？ぐぬぬ・・・書き直してくる！」

ものすごく悔しそうな顔をしながらズンズンと自分の部屋に歩いていく春蘭
これでちゃんと書いてくれるのなら有難いことだ

「がう！」

「え？」

突然の動物の鳴き声に振り返ると、そこにはたてがみが橙色の小さい獅子がいた

「あら、どこから迷い込んだのかしら？」

手招きをすると近寄ってきた…というか、可愛い…

「…なんか、変わった子ね…こんなところに何の用かしら？」

優しく頭を撫でてやると、実に気持ちよさそうにするのでもっと撫でたくなってしまう

「ナッツくん？」

何処からともなく声が聞こえる。この声は…確か京子…だったかしら？

声のする方に歩いていくと、思ったとおり京子が何かを探している

「何か探しものかしら？」

「あ、えつと…荀？…さん？」

「桂花でいいわよ」

「うん…あ、ナッツ君！」

「がう！」

もぞもぞと体をゆすって、ナッツと呼ばれる獅子は京子の方に行ってしまった

心無しか、嬉しそうに頬擦りしているように見える

「あら、あなたの子かしら？」

「ううん、ツナ君の子だよ」

「へえ…そうなの」

「うん。性格はツナ君の心を反映してるんだって」

「なかなか興味深いわね…」

「うん！可愛いよね、ナッツ君」

そういうことじゃないんだけど…
たしかに可愛いのは認めるわ

「くうう……」

と、二人で話している間にナッツは寝てしまったようだ

「あ、寝ちゃったね」

「綱吉に返したほうが良いんじゃない？」

「そうだね」

ということ、綱吉に返すべく部屋に行った
まさか・・・とは思いつつ扉を開けると、案の定机に突っ伏して
寝ていた

「まったく、だらしないわね・・・」

「あはは でも、昨日も徹夜で書き物をしてたみたい」

「え・・・？そうなの？」

「うん、昨日もお夜食持っていてあげたの」

聞かされた真実に少し罪悪感を覚えてしまった
華琳様の負担を減らすためにちよつとずつ増やしていたのだ
もちろん、私の意地悪な分も入っていた
京子は綱吉の机にナツツを置いて綱吉に布を掛けてやっている
それを見て、私は机に乗っている竹簡を三分の一ほど抱えた

「それ、どうするの？」

「あ、あんまり遅いと華琳様が困るでしょ？だから、やってあげるのよ」

京子がきよとんとしたあと、ニコリ微笑んだ

「優しいんだね、桂花ちゃん」

「なにいつてんのよ！別にこいつのためじゃないんだから！すべては華琳様のためよ、ほら、京子も持ちなさい」

「え？は、はい！」

京子に私が持っていた竹簡を渡して机からもてるだけ竹簡を抱える

「ほら、いくわよ！」

「はいはい」

私は部屋に戻って竹簡を机に置き、京子が持っていた竹簡も受け取って机に載せる

「さて、私は増えた仕事に取り掛かるから、もういいわよ」

「うん。あ、そうだ、夜にお夜食持って来るね」

「ありがとう」

短くそう答えて仕事に取り掛かる

はぁ・・・とんだ貧乏くじだわ・・・ま、いいこともあつたけど

私の名前は荀 文若

誇りある華琳様の将にして華琳様の下僕

これからも下僕として公私ともに華琳様を支えていくのだ

「でも、たまにはナッツと遊ぶのもいいわよね」

今日は新しい楽しみを見つけた桂花なのでした

第14弾 日常編〜桂花の日常〜(後書き)

第15弾 日常編〜春蘭の日常〜

「おはよう…」

「おはようございます、將軍」

うむ、今日もいい朝だ！

私の名は夏侯惇。字は元讓、華琳様の軍で一番の実力者だ！
今回は私の日常を見せてやろう
と言っても、ほとんどが鍛錬や部隊の訓練なのだが

「おや、姉者…おはよう」

「おお！おはよう、秋蘭！」

今、私に挨拶してきたのは私の妹、秋蘭だ。私と同じでよく頭が回り、華琳様に尽くしてくれる。私の自慢の妹だ

「今日は姉者は予定はあるのか？」

「今日は…一日、鍛錬をしようと思っているが」

「そうか…！わざわざすまなかったな、姉者…では私は急いでいるから」

そう言い残し、心無しか早足で立ち去る秋蘭
…なんか、気になるな

そう感じた私は秋蘭のあとを尾行することにした

抜き足差し足、忍び足…

「…何してるのかしら？」

ドキイ！？

聞き覚えのある声に振り返ると華琳様が立っていた
その視線は前の秋蘭に行き…

「…あら？」

華琳様も同じように隠れて覗き始めた

「待ったか？秋蘭」

「いや…ちょうど来たところだ。では、行くっか」

「ああ」

そのまま二人は出かけてしまった

「くっ！綱吉め…遂に我が妹に手をかけようとは！」

「へえ…やるじゃない、綱吉」

華琳様は言葉とは裏腹にもものすごい殺気を放っておられた…正直怖いですよ

「春蘭！追っわよ」

「へっ！？は、はっ！」

ここによくわからない追跡コンビが誕生した

………続く

第15弾 日常編〜春蘭の日常〜(後書き)

極短!!!!!!

第16弾 日常編〜秋蘭の日常〜

やあ。みんな元気だろうか？

私の名は夏侯淵。字は妙才だ。今日は私の日常をお教えしようと思う
と言っても今日は一日綱吉と街を回る予定だ

……なにやら私たちを尾行している『方々』もいるようだが、ここ
は気にしないでいようか

暫くすると、いつもの服装で綱吉がやって来た

「待ったか？」

「いや…ちょうど来たところだ。では、行こうか」

「ああ」

私たちは並んで歩き出す。さて、今日はどこに行こうか…などと考
えていると綱吉に声をかけられた

「今日は、どこに行くんだ？」

「そうだな…街の様子をみながら少し歩こうか」

「…わかった」

私たちは取り敢えず、街を見て回ることにした。特に問題も無く、いい街になってきたようだ

華琳様がここの刺史になったばかりの頃は他の街のように荒れていた。盗賊に毎度襲われ、食糧や金品、果ては女まで奪う始末。まさにこの世の地獄と言ってもいいほどであった

それを華琳様自ら先陣に立ち、盗賊共を討伐、無能な役人を切り捨て税を下げるだけ下げ、民に食料も与えた

そして、この街は一応の平穏を取り戻した。それからここまで栄えさせるにはかなりの時間が掛かったようだが、華琳様はそれに慢心することなく、さらに精進されている…私としては、体を壊さないか心配だがそうも言っておれん状況なのだろう

「秋蘭」

「ん？」

「どうした？ぼーっとしていたが」

「気にするな、少し考え事をしていた」

「そうか。…だが、さっきから誰かが尾けてきているが？」

「それこそ、気にするな」

「…？…ああ」

きよとんとした顔で私を見る綱吉。ああ、その表情…意外と可愛いな

「うむ。…おや？あそこにいるのは…」

私の目に入ってきたのは、綱吉の部隊の三人の副隊長。
確か、楽進、李典、于禁…だったか？

「あ、たいちよ〜」

「お前たち…何をしている？」

「申し訳ありません隊長、何度も注意したのですが…」

「まあ、ええやんか今日ぐらい」

そう言いながら、沙和は『阿蘇阿蘇』を読み耽り、真桜は『絡繰、
夏侯惇將軍』を改造している

「…仕事は終えたのか？」

「はい、後は報告だけなので、私一人でも大丈夫です」

「そうか」

「綱吉」

「ああ、すまない俺はそろそろ行くから」

「わかりました」

「こんどウチらにもつきおーてもらおうでー」

「そーなのー！」

「また今度な」

綱吉は軽く手を振り私と共に歩き出す…ふむ、意外にも好かれていたのだな

「そろそろ、昼餉にでもしようか」

「もうそんな時間か、わかった」

わたしたちは適当な店に入り…適当に昼餉を取り…その後も楽しく過ごした…のだが

「…秋蘭」

「…ふむ、そろそろ出てきてはいかがですか？華琳様」

私の一言で悪びれた様子もなく現れる私の主…と姉者

「あら、やっと気づいたのね？」

「鍛練が成ってないぞ、秋蘭」

「綱吉は気づいてましたよ。その上で私が気にするなど言っておいたのです」

「そうなの？…気づいてて、見せつけた…と？」

む…しまった。少々ばかり怒らせてしまったか…

「綱吉」

「なんだ？華琳」

「明日、罰として一日私に付き合いなさい。これは命令よ」

「…わかった」

綱吉がやれやれといったかんじで了承する。さて…私はこの場から

……

「逃げられると思って？秋蘭」

「……いえ」

「さ、行きましようか秋蘭。じゃ綱吉、また『明日』」

こうして、私は華琳様に連行され朝まで嬉しいお仕置…んんっ、罰を受けたのだった

まあ…今日が楽しかったから良しとしよう

次の日、街中を仲良く歩く華琳様と綱吉の話は、またいずれ

第16弾 日常編〜秋蘭の日常〜（後書き）

よし、次は季衣だw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3455t/>

真・恋姫無双 三国志のボンゴレファミリー

2011年6月22日23時37分発行